

中華民國・台湾の国交維持外交

—馬英九政權から蔡英文政權まで（二〇〇八年～二〇一九年）—

浅野和生

はじめに

第一節 台湾の中華民國と国交国の変遷

第二節 台湾の總統就任式典への国交国等の参加

第三節 台湾政府の国交維持の外交努力
結語

はじめに

二〇一九年九月十六日、南太平洋島嶼国の一つ、ソロモン諸島が、それまで維持してきた台湾の中華民國との国交断絶を宣言した¹⁾。その四日後、九月二十日、同じく南太平洋島嶼国のキリバスもまた、中華民國との国交断絶を宣言した²⁾。

この結果、台湾の中華民國政府と国交を保つ国は十五カ国に減少した。二〇一六年五月二十日に、今日の民主進歩党（以下、民進党と略す）蔡英文政權が発足したとき、国交を保っている国は二十二であったから、わずか三年半の

間に国交国が七カ国、およそ三分の一も減少したことになる。これに対して、その直前の二〇〇八年から二〇一六年五月までの国民党・馬英九政権の場合、発足当初の国交国数二十三が八年間で一減の二十二になるにとどまった。

民進党の蔡英文政権と国民党の馬英九政権における、国交国の維持と減少における対照的な事実の背景には、両政権の対中外交姿勢の違いがあることは周知のとおりである。すなわち、馬英九政権が、いわゆる中台間の「九二年コンセンサス」を基礎に、宥和的な中国と台湾の関係を目指し、両者間に定期的な交渉を実現させ、経済交流を積極的に進めたのに対し、蔡英文政権は、「九二年コンセンサス」と中国の主張する「一つの中国」原則を承認せず、中台関係の「現状維持」を掲げている。これに対して、中国共産党政権は、馬英九政権期間には、台湾の国交国に対して、台湾との国交断絶と中国との国交樹立を積極的に求めることがなかった。しかし、蔡英文政権の台湾に対しては、国交国に対して台湾との断絶と中国との国交樹立を迫ってきたことは知られている。³⁾

しかし馬英九政権と蔡英文政権の、国交国維持のための努力については、今まであまり論じられていない。本小論では、両政権の国交国維持のための外交努力と両国の関係を紹介して、台湾の国際生存環境としての中台関係と、台湾と国交国との関係の一端を分析する。

第一節 台湾の中華民国と国交国の変遷

中華民国が辛亥革命によつて成立した一九一二年、国交国はゼロであったが、一年後の一九一三年には二十四カ国と国交を樹立していた。その後、国交国は増加を続け、一九四九年、中国共産党が中華人民共和国の成立を宣言する前には、国交国は四十七カ国にまで増大していた。⁴⁾ ちなみに、この年の国連加盟国数は、新たにイスラエルを加えて

五十九カ国となっていた。つまり、世界の独立国のおよそ八割が中華民國と国交をもっていたことになる。

一九五〇年には中華民國の国交の数は三十八に減少したが、アジア・アフリカ諸国が植民地から独立を果たして、国家数が増大したことに伴い、中華民國との国交を締結する国もあり、一九六九年には国交国は七十カ国となって、過去最多を記録した。しかし、国連の中国代表権が中華民國から中華人民共和国にとってかわられると、台湾の中華民國の国交国数は急減することとなり、蒋介石が死去した一九七五年には、その数は二十七カ国にまで減少した。さらに、蔣経国が逝去した一九八八年には、二十二カ国になっていた。これは、当時の国連加盟国数に対してわずか十四%であった。十九年間で四十八カ国の減少であり、およそ三年間で八カ国が減少するというペースであった。

その後、一九八八年から二〇〇〇年までの李登輝政権十二年では、国交断絶した国が十二あったが、一方で新たに国交を結んだ国が十九カ国あったので、国交国は都合七カ国増大した。つまり、政権発足時に二十二カ国であったものが、政権交代時には二十九カ国となっていた。ただし、一九八八年の国連加盟国が一五九であったのに対して、ソ連邦の解体と冷戦の終結などの影響で二〇〇〇年には国連加盟国が一八九カ国と、三十カ国増大していたので、国連加盟国数に対する比率は十五%強に微増しただけである。

その後、民進党の陳水扁政権期には、十カ国が台湾と国交断絶となった一方、新たに国交を樹立した国が四カ国にとどまったため、八年間で国交国が六カ国減少する結果となった。こうして二十九カ国との国交を保っていた中華民國は、陳水扁政権の終幕時には、国交国は二十三カ国にまで減少していた。

本小論が検討する二〇〇八年から二〇一九年の台湾の国交国については、馬英九政権の八年間で一減の二十二となっただけであったが、その後の民進党蔡英文政権三年四か月の間に七減で十五カ国となった。蔡英文政権期の減少ペースは、一九七一年の中華民國の国連脱退から蔣経国の死去までの十九年間に匹敵する速さである。以下、その経過

と状況について検討する。

その前提として、二〇〇八年に台湾の中華民国と国交を保っていた国について概観する。なお、各国情勢は、外務省の各国情報と、IMF統計および国連人口部の推計人口統計による。なお、各地域内の国家の順序は国名のアルファベット順である。

【ヨーロッパ】

ヨーロッパでは、バチカン市国だけが国交国である。日中戦争のさなかの一九四二年七月にバチカンは中華民国と国交を樹立し、その後一九四九年に中華民国が台湾に移転すると、そのまま台湾の中華民国との国交を継続してきた。カトリックの総本山のバチカンとしては、信教の自由を尊重しない共産党政府との国交を選択せずに今日に至ったものである。また、世界のカトリックに対して、司教の任命はローマ教皇の権限であるが、中華人民共和国はこれを内政干渉として拒否していたため、バチカンが北京政府との国交を結ぶことは困難であった。

なお、二〇一八年九月二十二日に、中国国内のカトリック司教の任命権について、「中国側が中国国内においても法王をカトリックのトップとして認める代わりに、バチカン側は中国が独自に任命した司教の正統性を認める」ことで、バチカンと中国が暫定合意に達したと発表されたが、双方の国交正常化には至っていない^④。

バチカン市国は、国家としては特殊な存在であつて、面積は〇・四四平方キロメートルにすぎず、人口も六一五人である。しかし、世界に十二億人を超えるとされるカトリックの総本山として、バチカン市国の面積、人口とは無関係に国際的に大きな影響力をもっている。その意味で、台湾にとつても、ヨーロッパのみならず国際社会における外交上の基盤として重要な意味を持つ。

【アフリカ】

二〇〇八年に馬英九總統が總統の任に就いたとき、台湾の中華民國と国交を有するアフリカの国家は四カ国であった。すなわち、ブルキナファソ、ガンビア、サントメ・プリンシペとスワジランド王国（現・エスワティニ王国）である。

ブルキナファソ ①面積 二十七万平方キロメートル、世界七十二位、②人口 一、九七五万人（二〇一八年推計値）、世界五十九位、③一人当たりGDP 七一九ドル（二〇一八年、IMF統計）、世界一七九位。以下、①面積、

②人口、③一人当たりGDPである。

ガンビア ①一万一千平方キロメートル、一五八位、②二二八万人、一四四位、③七一三ドル、一八〇位。

サントメ・プリンシペ ①九六四平方キロメートル、一七〇位、②二十一万人、一八七位、③一、九四七ドル、一四七位。

エスワティニ王国（二〇一八年四月に、従来のスワジランド王国からエスワティニ王国に改称） ①一万七千平方キロメートル、一五二位、②一一三万人、一五九位、③四、二六七ドル、一一三位。

以上のように、ブルキナファソを除けば、いずれも小規模な国家である。

【太平洋島嶼国】

太平洋島嶼国十四カ国のうち六カ国が台湾との国交を保ってきた。しかし、前述の通り、二〇一九年九月に相次いでソロモン諸島とキリバス共和国が台湾と国交を断絶し、その後まもなく中国と国交を締結したため、現在の国交国は四カ国である。

キリバス ①七二六平方キロメートル、一七四位、②十一万六千人、一九三位、③一、六四一ドル、一五一位である。ただし、排他的経済水域が三四四万平方キロメートルであり、日本の世界第八位四四七万平方キロメートルより

若干劣るものの、世界第一三位の広大な海の利権を掌握している。

マーシャル諸島 ①一八一平方キロメートル、一八八位、②五万八千人で、二〇七位、③三、八七九ドル、一一九位。排他的経済水域は一九九万平方キロメートルで、フィリピンとインドのEEZの中間ほどの広大な領域を持つ。

ナウル ①二十一平方キロメートル（東京都港区程度）、一九二位、②一万一千人、二二六位、③八、五六二ドル、七九位。排他的経済水域は三十万平方キロメートルを超えており、タイヤトルコより広い。

パラオ ①四五九平方キロメートル、一七九位、②一万八千人、二二二位、③一万六、一九五ドル、五十六位。排他的経済水域は六十万平方キロメートルを超えており、ギリシャやイタリヤよりその面積は広い。

ソロモン諸島 ①二万九千平方キロメートル、一六六位、②六十五万三千人、一三八位、③二、一九七ドル、一四二位。排他的経済水域は一五九万平方キロメートルで、フィリピンに匹敵する。

ツバル ①約二十六平方キロメートル、品川区より少し大きい程度、一九二位、②一万二千人、二二五位、③三、七九六ドル、一一二位。排他的経済水域は、七十四万九千平方キロメートル。

これら六つの島嶼国の排他的経済水域の合計は八六七万平方キロメートルであって、日本の四四七万平方キロメートルの二倍に近い広大な海域である。

【ラテン・アメリカ】

中華民国の国交国が最も多いのがラテン・アメリカで、十二カ国が国交を維持してきた。

ベリーズ ①二万二千平方キロメートル、一四六位、②三十八万三千人、一七八位、③四、八六二ドル、一〇五位。
ドミニカ共和国 ①四万八、六七一平方キロ、一二七位、②一、〇六二万人、八十六位、③八、三四一ドル、八十七位。

エルサルバドル ①二万一、〇四一平方キロメートル、一四八位、②六四二万人、一一一位、③三、九二二ドル、一一八位。

グアテマラ ①十七万八八八平方キロメートル、一〇四位、②一、七二五万人、六十六位、③四、五四五ドル、一〇八位。

ハイチ ①二万七、七五〇平方キロメートル、一四二位、②一、一一二万人、八十三位、③八六九ドル、一七一位。

ホンジュラス ①十一万二、四九二平方キロメートル、北朝鮮より小さいが韓国より大きい、一〇〇位、②九五九万人、九十四位、③二、五二四ドル、一四〇位。

ニカラグア ①一三万平方キロメートル、九十五位、②六四六万人、一一〇位、③二、〇三二ドル、一四六位。

パナマ ①七万五、五一七平方キロメートル、一一五位、②四一八万人、一二八位、③一万五、六四三ドル、五十八位。南北アメリカ大陸の結節点に位置し、大西洋と太平洋を結ぶパナマ運河があるなど、地政学的に重要な位置を占めている。

中華民国は、中米ではメキシコに接続するベリーズ、グアテマラとホンジュラス、エルサルバドルという隣接する四カ国と国交を維持し、さらにコスタリカを挟んでパナマとも国交を維持してきた。

パラグアイ ①四十万六、七五二平方キロメートル、五十八位、②六九六万人、一〇七位、③六、九五六ドル、一〇七位。人口は少ないが、日本列島を上回る面積を有する南アメリカ中南部の内陸国家である。

セントクリストファー・ネイビス ①二六一平方キロメートル、一八七位、②五万二千人、二二一位、③一万七、五一〇ドル、五十位。カリブ海に浮かぶ二つの島からなる島嶼国である。英連邦に属し、国家元首はエリザベス二世女王である。

セントルシア ①五三九平方キロメートル、一七七位、②十八万人、一八九位、③一万七五五ドル、六十九位。カリブ海に浮かぶ島嶼国家で、英連邦に属し国家元首はエリザベス二世女王である。

セントビンセント・グレナディーン ①三八九平方キロメートル、一八三位、②十一万人、一九六位、③七、三五四ドル、八十五位。カリブ海の島嶼国家で、英連邦に属しており、エリザベス二世女王を国家元首としている。

ハイチとドミニカ共和国は大アンティル諸島の一つの島を東西に分ける二つの国家であり、三つの島嶼国は、これと接続する小アンティル諸島を構成する国々の一部である。これらは、メキシコの南に位置するベリーズ、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグアそしてパナマとともに、カリブ海を囲む国家群である。つまり、中華民国はカリブ海周囲のおよそ半数の国々と、国交を維持してきたのである。

第二節 台湾の總統就任式典への国交国等の参加

台湾にとって、国交がある友邦国はもちろん、それ以外も含めて、總統の就任式典は各国使節を台湾に招く好機である。一九九六年に、李登輝總統の下で国民の直接投票によって總統が選出されるようになって以来、四年に一度の選挙によって總統が選出され、選挙後の五月二十日に總統就任式が挙行されている。その際には、友邦国から国家元首あるいは首相、総督等が台湾を訪れる。さらに、国交のない国からも、議員団あるいは政府派遣の祝賀訪問団が台湾を訪れるため、台湾が国際的な存在感を示す絶好の機会となっている。

二〇〇八年の總統選挙では、与党民進党から謝長廷と蘇貞昌の正副總統候補が、野党第一党の国民党から馬英九と蕭萬長の正副總統候補が立候補して、二大政党の一騎打ちの形で選挙が行われた。その結果、五十八・四五%を得票

した国民党ベアが勝利し、八年ぶりの政権復帰を果たすことになり、五月二十日に就任式典が執り行われた。⁽⁷⁾

馬英九總統の就任式典には、二十三カ国の国交国のうち二十二カ国からの特使を含む、合計五三〇人の外国使節の来訪があった。⁽⁸⁾

国交国からの使節団のうち、ソロモン諸島のソガバレ (Manasseh Damukana Sogavare) 首相、ペリーズのバロウ (Dean Oliver Barrow) 首相、ニカラグアのモラレス (Jaime Morales Carazo) 副大統領、サントメ・プリンシペのメネズ (Fradique de Menezes) 大統領、ツバルのイエレミア (Apisai Ielemia) 首相、エルサルバドルのサカ (Antonio Saca) 大統領、ナウルのステイブン (Marcus Stephen) 大統領、ホンジュラスのセラヤ (Jose Manuel Zelaya Rosales) 大統領は、馬英九總統の就任式に先立って、退任する陳水扁總統との会談も行った。⁽⁹⁾

このほか、アメリカからは、ホワイトハウスのアンドリュース・カード (Andrew Card) 大統領首席補佐官を団長に、ファーレンコフ (Frank Fahrenkopf) 前共和党全国委員長、民間団体を称するアメリカの対台湾窓口機関であるアメリカ在台湾協会のレイモンド・バーガート (Raymond Burchard) 理事長、同じく在台湾協会台北事務所ステファン・ヤング (Stephen Young) 所長のほか、国家安全会議のクローチ (Mr. J. D. Crouch) 前顧問、そして馬英九總統のハーバード大学留学時代の恩師、ジェローム・コーエン (Jerome Cohen) などが来訪した。

台湾の外交部 (外務省に相当) の発表では、以上の使節団は、スワジランド王国のムスワティ三世国王 (King Mswati 3) のほか大統領が八人、総督が二人、首相が三人、大統領府秘書長が二人、そして外相が一人とパチカンの特使一人である。

日本からは日華議員懇談会会長で元経済産業大臣の平沼赳夫衆議院議員を筆頭に、東京都知事の石原慎太郎、横浜市長の中田宏、沖縄県知事の仲井真弘などが台湾を訪れた。

なお、国交国ではないが、アメリカからの訪問団は一二〇人、日本からは七十六人が就任式典に参加しており、この二カ国の参加者が最も多かった。¹⁰⁾

二〇一二年五月二十日に開催された馬英九総統再任の就任式典には、各国から四十一の訪問団、合計二二〇人ほどが台湾を訪れた。これは、前回と比べると、訪問者数では半分の規模になっている。

その中で、太平洋島嶼国のキリバスからアノート・トン (Anotong) 大統領、マーシャル諸島からはクリストフアー・ローク (Christopher J. Loak) 大統領、ナウルからはスプレント・ダビッド (Sprent Dabwido) 大統領、パラオからはジョンソン・トリビヨン (Johnson Torbiong) 大統領が、南米パラグアイからはフェルナンド・メンテス (Fernand Lugo Mendez) 大統領が来訪した。また、中米のベリーズからはコルヴィル・ヤング (Colville N. Young) 総督、セントビンセント・グレナディーンからラルフ・ゴンサルヴェス (Ralph E. Gonsalves) 首相、ソロモン諸島からはゴードン・ダルシー・リロ (Gordon Darcy Lilo) 首相、ツバルからはウィリー・テラヴィ (Willy Telavi) 首相、ブルキナファソからはリュック・アドルフ・ティアオ (Beyon Luc Adolphe Tiao) 首相、サントメ・プリンシペからはパトリス・エメリー・トゥロヴォアダ (Patrice Emery Trovoadá) 首相、スワジランド王国からはバナバス・シブシソ・ドラミニ (Barnabas Sibusiso Dlamini) 首相が来訪した。さらに、ホンジュラスのボگران (Maria Antonieta Guillen de Bogran) 副大統領、ニカラグアのアヤスリーヴンス (Moises Omar Hallelevens Acevedo) 副大統領、セントクリストファー・ネイビスのローレンス (Edmund Wickham Lawrence) 代理総督が訪台した。¹¹⁾ また、ヨーロッパ唯一の国交国であるパチカンからは、前例に従って特使が派遣された。

以上によると、当時の二十三カ国の国交国のうち、十七カ国が政府首脳級の祝賀訪問団を派遣したことになる。国交国のうち政府首脳級の特使を派遣しなかったのは、ガンビア、ドミニカ共和国、エルサルバドル、グアテマラ、ハ

イチとパナマの六カ国であった。

アメリカからは、ホワイトハウスのオバマ大統領のウィリアム・ダリー (William M. Daley) 前大統領首席補佐官を団長に、スタインバーグ (James Steinberg) 元国務副長官、米国在台協会のバーガート理事長、同リチャード・ブッシュ (Richard C. Bush) 前主席などが台湾を訪れた。日本からは前回と同様に平沼赳夫衆議院議員を団長とする訪問団が派遣された。

二〇一六年には、与党国民党は、朱立倫と王如玄の正副総統候補を、野党第一党の民進党は、前回に続いて蔡英文総統を総統候補に、副総統候補には陳建仁を立て、さらに親民党は前回同様に宋楚瑜を総統候補に、副総統候補には新たに徐欣瑩 (国民党) を当てる、三つ巴の選挙戦が展開された。その結果、民進党の蔡英文ペアが五十六・一二%の得票で当選を決めた。⁽¹²⁾

二〇一六年五月二十日の蔡英文総統の総統就任式典に際しては、国交国二十二カ国のほか、非国交国から三十七カ国、合計五十九カ国から総勢七〇〇人ほどの訪問団を受け入れることになった。これは過去最高である。⁽¹³⁾

その内訳として、太平洋島嶼国の国交国六カ国については、マーシャル諸島はハイネ (Hilda C. Heine) 大統領、ナウルはワールガ (Baron Waga) 大統領、パラオ共和国はレメンゲソ (Tommy E. Remengesau) 大統領が、キリバスからはマーマウ (Taneti Maamau) 大統領が、ツバルはソポアンガ (Enele Sosene Sopoaga) 首相、ソロモン群島はカブイ (Sir Frank Uru Ofagoro Kabui) 総督が就任式典に参加した。

また、その他の国交国としては、ラテン・アメリカおよびカリブ海地域から、パラグアイのハラ (Horacio Manuel Cartes Jara) 大統領、セントクリストファー・ネイビスのハリス (Timothy Sylvester Harris) 首相、ニカラグアのアヤスリーヴンス (Omar Haleslevens) 副大統領、ベリーズのヴェガ (Gaspar Vega) 副首相、セントビンセント・グ

レナデューンはストレイカー (Pouis Straker) 副首相兼外務大臣、グアテマラ共和国はモラレス (Hilda Patricia Marroquin Argueta de Morales) 大統領夫人、ハイチ共和国はブリヴェール (Michaud Privert) 大統領夫人、ホンジュラス共和国からはベレス (Roland Edgardo Argueta Perez) 最高裁長官、ドミニカ共和国はガルシア (Andres Navarro Garcia) 外相、そしてエルサルバドルからはマルチネス (Hugo Roger Martinez Bonilla) 外相、セントルシアはリス (Robert Lewis) 文相など十二カ国から、そしてヨーロッパについては、バチカン市国からシェノット (Joseph Chenoth) 駐日大使が、さらにアフリカからは、スワジランド王国からムスワティ三世国王とブルキナファソのティエバ首相 (Paul Kaba Thiéba)、サントメ・プリンシペはドスラモス (Manuel Salvador dos Ramos) 外相の三か国の首脳ということで、つまり、二十二カ国の国交国すべてから訪問団が参加した。

このほか、アメリカは、カーク (Ron Kirk) 前通商貿易代表、ネグロポンテ (John Negroponte) 前国務副長官、アメリカ在台協会バーガード理事長、アメリカ在台協会台北事務所のモイ (Kin W. Moy) 所長、さらに米国ステイムソンセンター東アジア計画のロンバーグ (Alan Romberg) 主任などが台北を訪れた。日本からは、交流協会の今井正理事長、交流協会台北事務所の沼田幹夫代表、日華議員懇談会の古屋圭司幹事長が参列した。

さらにシンガポールはタルムジ (Abdullah Bin Tarmugi) 前国会議長、シンガポール駐台北商務事務所黄偉權 (Simon Wong Wie Kuen) 代表、カナダからはカナダ台湾国会議員友好協会のスグロ (Judy Sgro) 会長夫妻、インドネシアは、ワナンディ (Sofjan Wanandi) 副大統領首席経済顧問、マレーシアからはマレーシア友好貿易センターのブン・シュッケン (Daruk Adeline Pung Shuk Ken) 代表夫妻、フィリピンからはフィリピン・マニラ経済文化事務所ペレス (Amadeo Perez Jr.) 主席、EJからは欧州議会台湾友好グループのリケット (Dominique Riquet) 副主席、オーストラリア連邦から衆議院ピシヨップ (Bronwyn Bishop) 議員、オーストラリアから国会台湾友好グループのアモン

(Werner Amon) 主席、ブラジルの連邦参議院マルタ (Magno Malta) 議員、チリから衆議院のロブレス (Alberto Robles) 議員、チェコ共和国からフォンドラ (Alexandr Vondra) 前副首相、デンマークの国会台湾友好グループのミックセルセン (Brian Mikkelsen) 主席、エストニアの前内政部長で国会台湾友好グループのラーネット (Kalle Laanel) 主席、フランスの国民議会台湾友好グループのロンクル (François Loncle) 主席、ドイツの連邦国会のフィッシュャー (Axel Fischer) 議員、ハンガリーからは前教育文化及環境保護大臣のフォードル (Gabor Fodor) 議員、インドの人民党のジョリー (Vijay Jolly) 顧問、アイルランドの国会台湾友好グループのマックギネス (John McGuinness) 主席、イスラエル国会のヤクモヴェイチ (Shelly Yachimovich) 議員、イタリアの国会台湾友好協会のガルベティ (Guido Galperti) 副主席、ヨルダンの衆議院衛生環境委員会ヒジャチン (Raed Hijazin) 主席、韓国の趙慶泰国会議員、ラトビアのバルト海議会主席兼国会台湾友好グループのプバン (Janis Vuvans) 副主席、ミャンマー共和国のミャンマー台湾貿易協力委員会ロマオ (Hla Maw Oo) 主席、オランダのファンアクト (Andreas Van Aet) 前首相、ナイジェリアの参議院外交委員会スンモヌ (Monsurat Sunmonu) 主席、ペルー共和国のガルシア (Victor Andres Garcia Belande) 国会議員、ポルトガルの国会台湾友好グループのオリベイラ (Paulo Rios de Oliveira) 主席、スロバキアのラディコヴァ (Iveta Radicova) 前首相、南アフリカ共和国インカッタ自由党党首のブテレッチ (Mangosuthu Buthelezi) 親王、スリランカ共和国の統一国民党執行委員会委員で西方省のグナワルダナ (Lasantha Gunawardana) 委員、タイのクラサエ (Krasae Chanawongse) 前外相、イギリスの英台国会グループのエヴァンス (Nigel Evans) 共同主席そして、ローマ教皇庁万民福音部タイファイホン (Savio Tai-Fai Hon) 総司教が祝賀に訪れた¹⁴⁾。

以上のように、中国からの圧力が高まる中、発足した台湾の蔡英文政権は、過去最高数の使節団を迎え入れて、国際的認知を高めての門出となった。

第三節 台湾政府の国交維持の外交努力

ここでは、台湾政府による積極的な外交努力に焦点を当てるため、相手国から台湾への主要政治家の訪問とそれに対する台湾における対応については詳述せず、総統あるいは副総統などによる国交国への訪問に注目して分析する。なお、台湾の総統、副総統等の外遊については、主として台北駐日経済文化代表処の公式ホームページの「台湾週報」欄に依拠し、台湾および日本の新聞等で確認して記述した。

(1) アフリカ諸国との外交

二〇〇八年の馬英九政権の発足以来、初めてそして唯一の国交断絶となったのがガンビア共和国だった。ガンビアと台湾は一九九五年七月に国交を樹立していたが、馬英九政権二期目の二〇一三年十一月十四日、ガンビア政府は一方的に、中華民国政府に対して国交断絶を宣言した。この宣言は、台湾政府にとっては寝耳に水であったが、ガンビア側は「国の戦略的利益を考慮して」決定したと述べ、自分、中国と国交を結ぶことはないとした。他方、中国政府のスポークスマンは「自分たちも海外の報道を通じてはじめて知った」と述べて、積極的にガンビアとの国交樹立に動く意思のない事を示した。^[15]

二〇〇八年五月二十日に発足した国民党政府は、当初から対中関係の改善を最優先しており、馬英九総統は就任から三週間ほどで、公式訪問団を中国に派遣した。これにより、台中窓口機関のトップ会議を実現し、航空機による相互の直航をはじめ、具体的な関係強化に努めてきた。同時に、「外交休戦」を掲げて、国際場裏において、台湾の国

際生存空間を拡大するために中国と対決姿勢をとって、新たな国交国獲得を目指すことはしなかった。これを中国政府は好意的に受け止め、馬英九政権一丁目には、中華民國の国交国数は当初の二十三カ国のままで四年間が経過していた。このことは、馬英九政権の対中政策、すなわち対中宥和を基礎として、国際生存空間の維持を図る「活路外交」の有効性を示したようであった。

馬英九政権では、選挙において再選を決めた後、一丁目の任期の最後、二〇一二年四月七日から十八日にかけて、馬英九総統自身がアフリカの国交国のうち三カ国に訪問して、友好関係の確認に努めた。¹⁵⁾

この間、四月十一日から十四日にガンビアを初めて訪問した馬英九総統は、四月十一日夜には、ガンビアの民族衣装を着用し、ヤヒヤ・ジャメ (Yahya Abdul-Aziz Jemus Junkung Jammeh) 大統領主催の歓迎晩餐会に出席すると共に、「ガンビア共和国司令級勲章」を授与された。また、馬英九総統からは、台湾もかつて発展するために外国からの援助を受けていたから、海外援助をできる今は、「人道的援助の提供者」としての役割を喜んで担うとして、経済援助提供の意志を示した。十二日には、台湾の「財団法人 国際合作(協力) 發展基金会」がガンビアの人々に栽培技術を指導している現場を見学した。さらに馬英九総統は、十三日には、ガンビアが国際社会で、台湾のために公正な発言をしていることに感謝の意を示した。¹⁷⁾

しかし、ガンビアでは中国との関係改善への期待から、その一年半の後、一方的に台湾と断交した。一方、中国は、馬英九政権による対中宥和の外交政策が継続されている間、ガンビアとの国交縮結を進めようとしなかった。つまり、台湾とガンビアは国交を断絶したが、ガンビアは中国と国交が結ばなかった。しかしその後、二〇一六年一月の総統選挙で、国民党が敗北し民進党の蔡英文が当選したことで対中政策が変わろうとすると、その政権発足を待たずに、三月十七日、ガンビアと中国は国交樹立を発表した。つまり、蔡英文政権がスタートする前に、中国政府はガンビア

と国交を樹立することで圧力をかけ、警告を發した。

この他にも、蔡英文政権発足に際して、中国が台湾への外交的圧力をかけた事例がある。すなわち、二〇一四年十一月にケニアで、不法入国と詐欺行為の疑いで、二十八人の台湾人を含む七十七人が逮捕され、裁判が行われていた事案で、当初判決が出された二十三人のうち八人が、この四月十三日に、中国からの圧力で、台湾ではなく中国に移送された。台湾は四月十一日には、この八人を台湾に移送するよう要求し、残る十五人も台湾への移送を求めているが、ケニアは中国からの要求に応じたのであった。¹⁸⁾

さらに五月二日、マレーシアで詐欺の容疑で摘発された台湾人三十二人が中国本土に引き渡された。この件でも台湾はマレーシアに引き渡しを要求していたが、マレーシアが中国の要求に応じる形でこれらの台湾人は中国へ移送された。¹⁹⁾

以上のように、馬英九政権末期、次期總統選挙で民進党の蔡英文への政権交代が確定した段階での、中国とガンビアの国交樹立、ケニア、マレーシアの台湾人犯罪者の中国への移送などは、新政権に対中政策を変えさせようとして、中国が圧力をかけた事例と考えられる。

これに対して、蔡英文政権は、多数の国から過去最大の祝賀訪問団を受け容れることで、自らの存在を示した。また、蔡英文總統は、五月二十日の就任演説において、改めて、「一九二年コンセンサス」を認めない立場を示した。²⁰⁾

ガンビアの国交断絶は、台湾が経済援助や人材育成支援をしても、中国との関係への期待あるいは中国からの圧力があれば、国交国が台湾との国交を断絶し、中国との国交を樹立する一つの事例である。しかも、この場合、台湾の対中政策に応じて、中国が国交樹立の可否、時期を判断して実行していることは明らかである。

なお、馬英九總統の八年間においては、馬英九總統によるアフリカの国交国へのアプローチは二回行われた。この

他、二〇一〇年十二月二十日に、呉敦義行政院長（首相に相当）が、ブルキナファソを訪れ、再選されたコンパオレ（Blaise Compaoré）大統領の就任式典に出席した。

すなわち、馬英九總統が再選を決めた後、馬英九總統は二期目の政權スタートを前に、ガンビアと合わせてブルキナファソ、スワジランド王国というアフリカ国交三国歴訪を実施した。また、二〇一四年四月八日からブルキナファソを訪れた馬英九總統は、歓迎の公式晩餐会に、コンパオレ大統領から贈られた同国の民族衣装を着用して出席し、ブルキナファソの国家最高の栄誉を象徴する「国家功勞勲章グラン・クロア（Grand-Croix de L'Ordre National）」の授与も受けた。²¹ 馬英九總統は、この勲章の授与は、ブルキナファソ政府が両国間で長期的に成功している協力計画に対して示された評価であるとし、台湾は引き続き協力計画を推進していくとの決意を示した。翌九日には、馬英九總統は国立コンパオレ病院をコンパオレ大統領とともに訪れ、同病院を視察したが、その際「約七十%の医療器材は、台湾からのものであり、病院関係者も埔里キリスト教病院が派遣している」と台湾による貢献を強調した。

しかしながら、そのコンパオレ大統領が二〇一四年十月三十一日に辞任すると、ブルキナファソでは、政局不安定となり、二〇一五年十二月にカボレ（Roch Marc Christian Kaboré）大統領が就任するまで、一年二か月に五回の大統領交代があった。この間、カボレ大統領の就任を含めて、大統領就任に際して祝賀のために台湾から政府首脳級の特使がブルキナファソを訪れることはなかった。

これに対して、二〇一二年の馬英九總統再任の式典にも、二〇一六年五月の蔡英文總統の就任式典でも、ブルキナファソからは首相が参加していた。しかしながら、二〇一八年五月二十四日にブルキナファソは国交断絶を宣言し、²² 二十六日には中華人民共和国との国交を樹立した。

ブルキナファソ外務省は、台湾との断交声明において、中国に関する直接の言及を避けつつ「世界情勢の変化と、

わが国および地域における社会・経済面の課題を踏まえ、わが国の立場を再検討せざるを得なくなつた」と説明した。一方、台湾の蔡英文総統は台北で記者会見し、「中国はドル外交をもてあそんでいる。多くの国と外交関係を結ぶため、巨額の資金提供を約束し、誘惑している」と批判、台湾はこうした外交に関与しないとの立場を示した。²³⁾

なお、ブルキナファソと中華民国とは、当初一九六一年に国交を結んだが、一九七三年に断交しており、李登輝時代の一九九四年に改めて国交を回復していた歴史があり、今回は二度目の断交である。

サントメ・プリンシペの場合は以下の通りである。まず、二〇一二年四月の馬英九総統によるアフリカ国交国訪問の際、当初は四カ国訪問と伝えられ、サントメ・プリンシペも訪問先に含まれているようだったが、最終的に三カ国訪問となり馬英九総統は訪問しなかつた。²⁴⁾しかし、二〇一三年十一月にガンビアが台湾と断交したことを受けて実施された二〇一四年一月のアフリカ国交国訪問では、ブルキナファソ、スワジランド王国とともに、サントメ・プリンシペも馬英九総統は訪れた。この時、一月二十四日から二十五日まで二日間の訪問で、コスタ(Manuél Pinto da Costa)大統領と複数回会談した馬英九総統は、挨拶のなかで「台湾の連日清教授が二〇〇三年〜二〇〇六年に同国において推進したマラリア感染予防・治療プロジェクトにより、同国のマラリア蔓延率は四%以下にまで下げること成功した。その他の農業牧畜、インフラ建設、電力供給、情報科学技術、教育文化などの分野についても、双方の協力プログラムがある」と述べた。

また、サントメ・プリンシペからは、二〇一二年五月の馬英九総統再選の就任式典に首相が参列したほか、二〇一五年六月十日にはディオゴ(Diogo da Graça Diogo)国会議長が訪台して馬英九総統と会談すると、馬英九から、各種国際組織への台湾の参加支持に謝意を表するとともに、今後も引き続き支持するよう求めていた。さらに二〇一六年五月二十日、蔡英文総統の就任式典にも、ドスラモス(Manuél Salvador dos Ramos)外相が訪台して参加して

いる。

しかしながら、その二〇一六年十二月二十一日に、サントメ・プリンシペは台湾に対して一方的に国交断絶を宣言し、二十六日には中国と国交を樹立した。台湾側は、中国からの「一つの中国」原則による圧力を指摘するとともに、中国が、サントメ・プリンシペに対して、台湾とのあらゆる政府関係を打ち切ることを条件に、同国が必要とする経済、社会の発展及び民生上の需要を全面的に支持し、支援することを約束したものであり、「金銭外交」の結果であると非難した。さらに、台湾がサントメ・プリンシペに対して長年にわたって、国民の公衆衛生の向上や福祉のために貢献してきた事実を無視したとして、同国に対しても「強い失望と遺憾の意」を表明した²⁵⁾。

この結果、アフリカ諸国のうちで今日まで台湾との国交を維持している国は、エスワティニ王国（旧スワジランド王国）と今日まで良好な関係の中華民国は、一九六八年に国交を樹立して以来、エスワティニ王国（旧スワジランド王国）と今日まで良好な関係を継続している。馬英九政権の任期には、前述のとおり二〇〇八年の就任時に国王が来訪したが、その後、同年九月五日に、蕭萬長副総統が同国を訪れて国王とも会談した²⁶⁾。さらに、二〇一〇年七月二十九日には、国王夫妻が台湾に来訪して馬英九総統と会談している。その際には、馬英九総統は、「中華民国とスワジランドが一九六八年に国交を樹立して以来、今年で四十二年となる。当時、故・蔣介石総統が故・ソブーザ二世 (Sobhuza II) 国王にスワジランド独立を祝賀する電報を送り、双方は同時に国交を樹立するとともに、蔣総統はわが国の国連代表団が全方でスワジランドの国連加盟を支援するよう指示した」と国交の始まりを回顧した²⁷⁾。

先述の通り、二〇一二年四月の馬英九総統のアフリカ歴訪の旅の際には、同国を訪問している。四月十五日にムスワティニ三世国王と公式に会見したが、この三国訪問の成果について馬英九総統は、「このたびのアフリカ地域の友好国への初訪問では、三カ国の元首とより一層の密接な交流を持つことができ、双方の考え方や距離も大いに近づいた」

と高く評価した。²⁸⁾

このため、二〇一二年の馬英九再任の就任式典には、先述の通りドラミニ首相が訪台したが、民進黨への政權交代を果たした二〇一六年の蔡英文總統の就任式典には、国王が参列した。これに対して、蔡英文總統は、二〇一八年四月十七日にスワジランドを訪問して、同国の独立五十周年に祝意を表するとともに、両国の国交樹立五十周年を記念した演説を行った。国王との会談では、外国の国家元首に対する最高位の勲章「The Order of the Elephant」がムスワティ三世国王から授与された。蔡英文總統から、両国の今後について、技術交流の拡大と相互協力の互恵の関係を基礎として、互いの協力を全面的に深化させるといふ二つの方面からのパートナーシップ強化の考えが示されるとともに、共同声明に署名した。²⁹⁾

以上のごとく、エスワティニ王国との外交関係は、二〇一九年末現在まで安定的に維持されている。

(2) ラテン・アメリカ諸国との外交

台湾の中華民国とラテン・アメリカ諸国とは、従来、十二カ国との国交が維持されてきた。二〇〇八年から二〇一二年の馬英九政権期間においては、国交断絶の事例はなかったが、二〇一六年の民進黨の蔡英文政権誕生以後、三年間で三カ国が国交断絶し、中国と国交を樹立した。これらの国の中でニカラグアは、一九三〇年に中華民国と国交を樹立した古い友好国であったが一九八五年に一度国交を断絶し、その後一九九〇年に改めて国交を回復していた。またセントルシアも、一九八四年に国交を樹立したものの一九九七年に一度は国交を断絶して、改めて二〇〇七年に国交を回復した歴史がある。これら二カ国は、馬英九政権の任期において国交断絶をしておらず、蔡英文政権の台湾と国交を断絶した三カ国については、今回が初めての国交断絶である。

二〇〇八年からの第一期馬英九政権では、就任三カ月目の八月に、馬英九總統がパラグアイとドミニカ共和国を訪れ、その間にトランジットでパナマを訪問したが、その主たる目的はパラグアイとドミニカ共和国の新大統領就任式に出席することであった。

馬英九總統は、八月十三日、トランジットで立ち寄ったパナマの空港の貴賓室で、トリホス(Martin Erasto Torrijos Espino)大統領と懇談した後、パラグアイに到着した。馬英九總統は十四日、退任するニカノール・ドゥアルテ(Oscar Nicanor Duarte Funes)大統領と会談し、「活路外交」と「兩岸外交休戦」の理念を説明した。また、十五日には、フェルナンド・ルゴ(Fernando Armino Lugo Méndez)新大統領の就任式に参列した。馬英九總統は、この訪問で、台湾とパラグアイが今後、農漁業、中小企業、ハイテク、土地改革等の分野で協力関係を築けるとの認識を示した。¹⁰⁾

次に、八月十六日にドミニカ共和国に到着した馬英九總統は、フェルナンデス(Leonel Antonio Fernández Reyna)大統領の就任式典に参列した。続いて首都・サント・ドミンゴ市の市長から「シティー・キー」を授与された。これに応じて馬英九總統は、今後は両国の中央政府間交流だけでなく、地方自治体交流も強化すべきだとして、郝龍斌・台北市長を通じた両国首都の都市関係強化や、両市長の相互訪問などの交流促進への意欲を示した。¹¹⁾

第二回目のラテン・アメリカ諸国への馬英九總統の訪問は、二〇〇九年五月のベリーズ、グアテマラ、エルサルバドルの歴訪であった。五月二十八日から三日間の予定でベリーズを訪問した馬英九總統は、バーロウ(Dean Oliver Barrow)首相と会談し、二十九日午前、首都のベルモパン市を訪れ、コルヴィル・ヤング総督を表敬訪問した。その後、馬英九總統はベリーズ国会でシメオン・ロペス(Simeon Lopez)市長から「シティー・キー」を贈られた後、回国国会で演説を行った。

この訪問で、馬英九總統は、ベリーズは二大政党による内閣制であり、中華民國とともに自由民主主義の理念を支

持する国家であると述べ、さらにベリーズとの国交二十年間、双方の農業、情報産業、医療、石油探掘等の分野で良好な協力関係を築いていると述べ、協力計画を延長または拡大する考えを示した。⁽³²⁾

ベリーズの国会で馬英九總統は、これが中華民国總統として友好国の国会において行う初めての演説であるとし、国交二十周年の記念として意義が深いと述べた。また、憲法の規定に基づき、友好国との親睦、国際協力の促進、国際正義の提唱、世界平和の確保が、中華民国の外交目標であるとした上で、経済発展のためインフラ建設に協力することを明らかにした。また、(一) 極度の貧困および飢餓を撲滅、(二) 人材資源の開発強化、(三) 伝染病の制圧、(四) 環境の永続的發展を推進、(五) 世界的な協力發展のパートナーシップ強化を追求することが馬英九政權の外交政策であると示した。⁽³³⁾

続いて二十九日から、馬英九總統はグアテマラを訪問した。馬英九總統の訪問に先立って、その前日の二十七日、孫大成・中華民国駐グアテマラ大使からグアテマラ政府宛に二十七台の救急車が寄贈された。政府を代表して救急車を受領したコロン大統領夫人は、「わが国にはわずか六十六台の救急車があるのみで、地方の不便な地区の病人に対する搬送サービスはきわめて不足している」と述べ、「台湾寄贈によるこれらの救急車はわが国の不便な地方に住む人々、とりわけ妊産婦への健康と命の安全を配慮する上で大きな助けとなる。わが国の不便な地方に住む妊産婦の多くが、救急車による病院への搬送が足りず命を落としている」と感謝の意を示した。⁽³⁴⁾

五月二十九日にコロン (Álvaro Colón Caballeros) 大統領と会談した馬英九總統は、両国の友好が強固であること示すため、共同声明に署名した。その中で、具体的な友好の事例として、両国首脳は、国道CA19号の北線の建設工事における計画の実行情況に対し、満足の意を表明した。⁽³⁵⁾

次に、五月三十一日にエルサルバドルに入った馬英九總統は、退任するアントニオ・サカ大統領と会談した。馬英

九總統は会談後、台湾の協力で竣工したエルサルバドル外務省新庁舎の除幕式に出席した。翌六月一日には、新任のフネス (Mauricio Funes) 大統領の就任式に参列し、馬英九總統は「台湾とエルサルバドルは民主主義の理念を共有しており、台湾は必ずエルサルバドルおよび同国民を支持し、今後も引き続き両国関係を強化していく」と強調した⁽²⁶⁾。そのほぼ一か月後、馬英九總統は、六月二十九日に台湾を出て、パナマとニカラグアを訪問した。本来は、ホンジュラスにも訪問する計画があつたが、政情が不安定化したとして、訪問を取りやめている⁽²⁷⁾。

六月三十日にパナマ入りした馬英九總統は、七月一日のマルティネリ (Ricardo Alberto Marinelli Bercoc) 新大統領の就任式典に出席した。空港での記者会見で馬英九總統は、五月三日の大統領選挙が、民主主義と平和的ムードの下で終わり、民主主義のモデルが構築されたことに敬意を表した上で、両国関係が、一九〇九年の国交樹立以来一〇〇年を迎えており、「双方の友好関係は安定し、国民の往来は緊密」であるとの認識を示すとともに、二〇〇四年に自由貿易協定を締結したことが両国の貿易に大きなプラスになっていると強調した⁽²⁸⁾。翌日には、パナマ国会で演説し、「われわれの外交は必ず正当かつ正統な外交方式で推進する」と宣言するとともに、馬英九政権が推進する「活路外交」「外交休戦」の成果が上がっていることを強調した⁽²⁹⁾。

続いて馬英九總統は、七月三日からニカラグアを訪問して、オルテガ (Daniel Ortega) 大統領と会談をもつた。馬英九總統は「中米訪問で、中華民國は友好国に職業訓練や教育などの面で支援を強化できることを感じた。われわれはニカラグアと中小企業、職業教育等の方面の経験を共有し、さらには文盲一掃や経済発展に協力していきたい」と語った。合わせて、政府が推進する「活路外交」によって国交国、非国交国を問わず関係が進展し、世界貿易機関 (WTO) の政府調達協定に加盟し、世界保健機関 (WHO) の年次総会にオブザーバー参加を果たしたことなど、台湾の国際空間が広がった実績を強調した⁽³⁰⁾。

次に馬英九總統は、ホンジュラスの新大統領就任式に合わせて二〇一〇年一月末、同国と近隣のドミニカ共和国を訪問することとした。

すなわち、一月二十七日にホンジュラスに到着した馬英九總統は、「ホンジュラスと台湾の友好関係はすでに六十年を超えたが、両国は一貫して密接な友好協力関係を維持している」と述べ、「ホンジュラスが国家発展に邁進する途上において、中華民國は必要とする発展の経験および協力をできる限り提供し、両国が生存発展の戦略的パートナーとなることを願う」と述べた。

また馬英九總統は、同じく参列していたパナマのマルティネリ大統領と会談を持ったが、同大統領は、「一貫して台湾を誠実に支持している。台湾はパナマの友人であるので、今後もし引き続き台湾を支持していく所存である」と述べた。さらに、ホンジュラスのロボ (Portino Lobo Sosa) 新大統領とも会談した際に、台湾からホンジュラスの学童への廉価なパソコンの提供の希望が出されると、馬英九總統は、喜んで提供するとし、「ハード面以外にパソコンの教育訓練の機会も提供する」と承諾した¹¹⁾。

その後、馬英九總統はドミニカ共和国を訪れ、フェルナンデス大統領およびハイチのベルリーヴ (Jean-Max Bellevive) 首相と会談した。その場で、ハイチへの援助の拡大について、第一に医療と公衆衛生について、第二に住宅問題について、第三に職業訓練と就業について、第四に震災孤児の養育について、協力することで合意した¹²⁾。

二〇一一年五月には、蕭萬長副總統がパラグアイを訪問し、五月十三日から十五日まで滞在、十五日のパラグアイ独立二〇〇周年式典に参加した。蕭萬長副總統は「両国は国交を締結して半世紀以来、双方の友好関係は次第に深まっている」との認識を示した。なお、蕭萬長副總統は、フランコ副大統領とともに、パラグアイ独立二〇〇周年および中華民國建国一〇〇周年記念切手発行式典を共同で主催した¹³⁾。

蕭萬長副總統は、つづけてパナマを訪問して、五月十六日には、パナマシティのヴァラリーノ (Bosco Vallarino) 市長から、「市の鍵」を贈呈された。⁴⁴⁾

翌二〇一二年に再選を果たした馬英九政権では、八月十六日のドミニカ共和国メディナ (Dario Medina) 大統領の就任式典に呉敦義副總統を派遣し、合わせてベリーズを訪問させた。⁴⁵⁾

二〇一三年八月には、馬英九總統はパラグアイのカルテス新大統領の就任式典への参加を目的に、合わせてハイチ、セントルシア、セントビンセント・グレナダ、さらにはセントクリストファー・ネイビスを訪問することとした。これによって、馬英九總統の二期八年で、ラテン・アメリカ諸国の国交国すべてへの訪問を終えることとした。⁴⁶⁾

八月十三日にハイチを訪問した馬英九總統は、マテリー (Michel J. Martelly) 大統領およびラモット (Laurent S. Lamothe) 首相と会談した。マテリー大統領と「両国元首共同記者説明会」を開くと、馬英九總統は、両国はこれまで農業、職業訓練、医療、教育などの分野の協力で大きな成果があったが、今回の馬英九總統のハイチ訪問が両国の国交五十七年間で初の台湾の總統の公式訪問として大きな意義があると述べた。また、三年前のハイチ大地震に際して、台湾が地震発生から十二時間後にレスキュー隊をハイチに派遣し、国際部隊と合同で捜索活動を行い、七名を救出したこと、台湾が恒久住宅二〇〇戸、仮設住宅五〇〇戸の建設を支援し、復興プロジェクトが順調に進んでいることに言及した。⁴⁷⁾

続く十四日、馬英九總統はパラグアイを訪問し、フランコ (Luis Federico Franco Gómez) 大統領およびカルテス (Horacio Cartes) 次期大統領と会談した。なお、馬英九總統は、国立アスンシオン大学において、ペドロ・ゴンザレス学長より名誉博士号を授与された。⁴⁸⁾

パラグアイを出発した馬英九總統は、十六日、セントルシアに到着し、ルイジー (Dane Pearlette Louisy) 総督、

およびアンソニー (Kenny Davis Anthony) 首相を訪問して、馬英九總統とアンソニー首相は、両国政府および国民間の友好協力関係強化に関する共同コミュニケに調印した。調印式の挨拶で馬英九總統は、「両国が自由、民主主義、人權、法治といった基本的価値観をきわめて大切にしていることを深く感じた」と強調した。さらに、馬英九總統はセントルシア国会の上下両院合同会議で演説した。⁽⁴⁸⁾

翌八月十七日、馬英九總統は、セントビンセント・グレナディーンへの初訪問を果たした。同地で、馬英九總統は、バラントイン (Frederick Ballantyne) 総督およびゴンサルベス (Ralph E. Gonsalves) 首相と会談した。会談に先立って、馬英九總統は、西半球最古である同国の植物園を訪問し、台湾南部の果樹である蓮霧 (レンブ) の苗木を植樹し、さらに台湾の支援で建設されたコロネア (Colonare) 橋の開通式に出席した。また、台湾企業が設計・建設に参加しているアーガイル国際空港ターミナルビルを視察した。会談で馬英九總統とゴンサルベス首相は共同コミュニケに調印し、両国の発展および国際参加に向けた確固たる意志と決意を改めて示した。⁽⁴⁹⁾

最後に、八月十八日、セントクリストファー・ネイビスを訪問した馬英九總統は、ダグラス (Denzil Douglas) 首相と会談し、両国間では長年にわたり、観光、グリーンエネルギー、農業、人材資源、教育文化などの分野で緊密に協力し、大きな成果をもたらしてきたと述べた。また、両政府間で、「犯罪者の」引渡し条約に調印した。翌日には、馬英九總統一行は、台湾の協力で建設されたシルバー・ジュビリー (Silver Jubilee) 体育場と、台湾企業が建設を請負う太陽光発電所などを視察した。さらに、馬英九總統とダグラス首相は、国会議事堂で共同コミュニケに調印した。⁽⁵⁰⁾

翌年、二〇一四年一月には、馬英九總統は、アフリカのサントメ・プリンシペおよびブルキナファソ訪問の際に、新大統領の就任式に合わせて中米のホンジュラスを訪問した。⁽⁵¹⁾

一月二十六日にホンジュラスに到着した馬英九總統一行は、ロボ大統領と会談し、両者は、中華民國とホンジュラスの二国間協力による「一郷一特産」(One Town One Product: OTOP) プログラムの成果展を參觀した。また、同地のバジエ・デ・アンヘレスの市長および「バジエ・デ・アンヘレス陶芸協会」会長から馬英九總統に対し、「市の鍵」とOTOPデザイン大賞の受賞作品が贈られた。

さらに、馬英九總統は、エルナンデス (Juan Orlando Hernandez) 次期大統領と会談し、就任の祝意を伝え、早期の台湾訪問を促した。馬英九總統は、二十七日にエルナンデス大統領の就任式典に出席して、帰国の途についた。⁵³⁾

次いで同年六月二十九日から七月五日にかけて、馬英九總統は、パナマの新大統領就任式に出席するとともに、エルサルバドルを訪問することとした。

二〇一四年六月三十日にパナマに到着した馬英九總統は、新大統領に期待を寄せるとともに「中華民國とパナマとはすでに一世紀以上もの国交があり、今回の訪問を通して、二国間関係をより一層強化することができるよう願っている」と抱負を語った。その後、リカルド・マルティネリ・ペロカル (Ricardo Alberto Martinelli Berrocal) 大統領および、フアン・カルロス・バレラ (Juan Carlos Varela) 次期大統領と会見したが、バレラ次期大統領は、「両国が今後も引き続き協力と交流を拡大し、双方の国民に恩恵がもたらされることを願っている」と述べた。翌七月一日に、新大統領の就任式典に馬英九總統は出席した。⁵⁴⁾

七月二日には、馬英九總統一行はエルサルバドルを訪問して、セレン大統領と会談した。両国の元首は二国間協力プログラム、経済・貿易・投資、エネルギー、観光の発展などのテーマについて、意見交換を行うと共に、共同コミニケに調印した。⁵⁵⁾

翌年、二〇一五年七月中旬、馬英九總統として最後の、ドミニカ共和国とハイチおよびニカラグアへのラテン・ア

メリカ諸国訪問が行われた。

最初の訪問国ドミニカ共和国には、七月十二日に到着して、在米華僑の李欽福が二十万米ドルを寄付してサン・ルス市に建てた「希望の路」コミュニティ児童センターを訪問した。翌日には、大統領府でメディナ大統領と会談し、馬英九総統はメディナ大統領より勳章を授与された。同日午後には、馬英九総統は議会で演説し、総統就任以来、中国との関係改善に力を入れ、「世界保健機関」(WHO)や「国際民間航空機関」(ICAO)の総会への参加が実現するなど、中台関係と国際関係が好転したと強調した。また、「東シナ海平和イニシアチブ」により、「台日漁業協議」が締結され、中国、日本、ニュージーランド、シンガポールなどと経済連携や投資に関する協定も締結したと説明した。さらに、台湾の国際競争における公平な地位を確保するため、「環太平洋パートナーシップ協定」(TPP)および「東アジア包括的経済連携」(RCEP)への参加を積極的に推進していくと述べた。⁵⁶⁾

馬英九総統は、七月十四日にハイチを訪問、マーテリー大統領と会談し、台湾が建設に協力したハイチ最高裁判所ビルの落成式に出席した。二〇一〇年の大地震の復興支援について、馬英九総統は、公衆衛生と医療、被災者の住居、職業訓練と就業指導、児童の養育など四つの方向性でハイチ政府と協力し、これまでに九項目の重要インフラ工事と農業協力計画が完成したと強調するとともに、今後も全力でハイチの震災復興を支援し、「人道支援の提供者」としての役割を果たしていく考えを示した。⁵⁷⁾

七月十五日、馬英九総統はニカラグアに到着し、ニカラグアの台湾企業「年興紡織公司」を参観した。このあと、馬英九総統はオルテガ大統領と会談した。翌十六日は、台湾とニカラグアの協力プロジェクトである「微小小型企業展示販売園区」を訪れ、モデル農場を参観した。⁵⁸⁾

十七日には、グラナダ市の市長から馬英九総統に、名誉貴賓証書およびシティー・キーが贈られた。この中米訪問

について馬英九總統は帰国時に、「時間は短かったが、協力と友好関係の強化に大きな成果と収穫があった」と強調した。⁽⁵⁰⁾

以上、馬英九總統のラテン・アメリカ外交を総括すると、馬英九總統としては八年間に八回、ラテン・アメリカへの外遊を行い、このほかに一期目の蕭萬長副總統と二期目の呉敦義副總統の訪問が各一度あったことがわかる。

これ以後は、二〇一六年五月二十日に總統に民進党の蔡英文が就任して以後の中華民國の外交である。

總統就任一か月後の六月二十四日、蔡英文總統は、パナマとパラグアイへの訪問に出発した。その主たる目的は、パナマ運河拡張工事の竣工式に出席する事であった。⁽⁵¹⁾なお、蔡英文總統の今回の外遊には、長栄海運(Evergreen Marine Corp.)、宏遠紡織(Everest Textile Co., Ltd.)、福寿実業(FWUSOW INDUSTRY)、義美食品(I-MEI Foods Co., Ltd.)、三陽機車(Sanyang Motor Co., Ltd.)、華碩(ASUSTek Computer Inc.)、永旺能源(General Energy Solutions Inc.)の七社が随行した。⁽⁵²⁾これは、今回の蔡英文總統のラテン・アメリカ諸国訪問では、台湾の企業の、これら訪問先での投資に向けた視察を促す任務も兼ねることにしたため。業種は、紡績、新エネルギー、食品、原材料、バイク製造、海運などである。

パナマを訪れた蔡英文一行は六月二十六日、「ココリ水門(Escullas de Cocoll)」で開催されたパナマ運河拡張工事完成式典に参加した。蔡英文總統は、この機会を利用して、各国から訪れていた外交関係者との交流に努め、パナマのパレラ大統領、マロ副大統領のほか、パラグアイ大統領、ドミニカ共和国大統領、ホンジュラス大統領、エルサルバドル副大統領、スペインのファン・カルロス一世、ジャマイカの首相、米国副大統領夫人、チリ大統領、グアテマラ副大統領、アルゼンチン副大統領、エクアドル副大統領、韓国の国土交通大臣、日本の日華議員懇談会副会長の衛藤征士郎衆院議員、フィリピン運輸通信大臣らと言葉を交わす、積極的な外交姿勢を示した。⁽⁵³⁾

続いて六月二十八日、蔡英文総統は、パラグアイを訪問し、中華民国駐パラグアイ大使館の新館オープニングに出席した。また、首都アスンシオン市のフェレイロ市長から「市の鍵」の贈呈を受けた。⁽⁶³⁾同日には両政府が「移民事務と人身売買防止の協力協定」を締結して、移民事務、国際テロに関する情報交換、人身売買防止の分野において、さらに深い協力関係を構築することとした。⁽⁶⁴⁾さらに、蔡英文総統は、カルテス大統領から勲章を授けられ、また同国と共同声明に署名したほか、両国の外交担当大臣による航空運輸協定の調印に立ち会った。⁽⁶⁵⁾

同日、パラグアイの国会を訪れた蔡英文総統は、国会演説を行い、台湾とパラグアイは地球の裏側まで距離があるが、両国の友情は変わらないと強調し、パラグアイとは自由、民主主義、人権といった価値観を共有しており、それが友好の基礎になっているとの認識を示した。⁽⁶⁶⁾

また、同年八月十六日、陳建仁副総統は、ドミニカ共和国でメディナ大統領とフェルナンデス副大統領の就任式に出席した。合わせて、同国を来訪中のグアテマラ、ホンジュラス、パナマ、ハイチなど各国の元首および政府要人と友好関係を深めた。⁽⁶⁷⁾

以上、順調に外遊を実施していた蔡英文総統は、二〇一六年十二月二十一日に、アフリカのサントメ・プリンシペが一方的に台湾と断交し、二十六日に中国との国交を樹立すると、直後の二〇一七年一月、ニカラグアの大統領就任式に合わせて、ラテン・アメリカのホンジュラス、ニカラグア、グアテマラとエルサルバドルを駆け足でめぐる外遊を実施した。すなわち、一月八日午後、ホンジュラスのソトカノ空軍基地に到着し、翌九日に大統領と会見すると、同日にニカラグアに入り、オルテガ大統領と会談、十日に大統領就任式典に参加、十一日にグアテマラに到着して大統領と会談を行い、十二日にエルサルバドルに入ると、翌十三日に大統領と二者会談に臨むという強行スケジュールであった。⁽⁶⁸⁾

一月九日にホンジュラスのエルナンデス大統領と首脳会談を行った蔡英文総統は、台湾留学のための奨学金制度の拡充や、台湾からホンジュラスへの企業投資を促進させることなどで一致し、蔡英文総統は「国際情勢は変動し続けているが、中華民国（台湾）とホンジュラス共和国の助け合いの心はこれまでと同様、変わることはない」と述べた。⁽⁶⁶⁾

同日にニカラグアに到着した蔡英文総統は、オルテガ大統領との首脳会談に臨み、「この外遊は非常に重要なものだ」とし、「台湾住民からの祝福を直接伝えるだけでなく、この機会を通して両国の友好をより深めることができる」と述べた。⁽⁶⁷⁾十日午後にはオルテガ大統領の就任式に参列した蔡英文総統は、ホンジュラス、エルサルバドル、ボリビア、ベネズエラ、ハイチの大統領と共に貴賓として扱われたが、蔡英文が序列第一位であった。また、オルテガ大統領は、その席で蔡英文総統を「姉妹同様の関係の蔡英文総統は、台湾共和国から来た総統で、この会場には私がエスコートして来た」と紹介した。⁽⁶⁸⁾

十一日にグアテマラに入った蔡英文総統は、大統領府「国立文化宮殿（The National Palace of Culture）」での両国首脳記者会見に先立って、台湾から持参した医薬品と学童用通学バッグをグアテマラのジミー・モラレス大統領に贈呈し、医療及び教育分野で両国の協力を促進したいとのメッセージを伝えた。その後、モラレス大統領は、蔡英文総統に、国家元首クラスに与えられる「ケツアル勳章」を、また蔡英文総統はモラレス大統領に「中華民國最高の榮譽勳章である「采玉大勳章」を授与した。蔡英文総統は、モラレス大統領が掲げる「インフラ整備」「医療・衛生向上」「教育」の三大柱について、二国間協力計画を両国間でまとめたと報告し、進行中の「CAI-9号道路拡張工事」と「医薬品及び医薬材料の寄贈計画」は順調に進展していると評価した。さらに蔡英文総統は十二日、グアテマラ国会において演説を行った。⁽⁶⁹⁾

一連の外遊の最後を飾って、一月十三日、蔡英文総統はエルサルバドルを訪問した。大統領府で、サンチェス・セ

レン大統領と会談した蔡英文總統は、ホセ・マティアス・デルガード国家大十字勲章を授与され、会談で「首脳会談では両国の友好関係を深めるといふ、揺るぎない決意について再確認した」。

以上のように、蔡英文總統は、ラテン・アメリカ諸国との国交維持のために努めてきたにもかかわらず、總統就任後に最初の海外訪問先としたパナマは、二〇一七年六月十二日、一方的に国交断絶を宣言した。これに対して台湾としては、「強い憤りと遺憾の意」を表明したが、国家の主権と尊厳を守るために、パナマとの外交関係をただちに断絶すると宣言した。

さらに、二〇一八年五月一日、ドミニカ共和国が台湾の中華民国との国交断絶を宣言した。中華民国は、前年のパナマと同様に、「巨額の金銭援助を条件に」中国当局が台湾との断絶を迫ったものと発表した。さらに、ドミニカ共和国のメイナ政権に対して、中華民国との友好関係、発展に長年尽くしてきた台湾からの恩情等は一切顧みない行動であるとして非難した。また、中国は一旦約束した経済的支援を実施していない事実を指摘して、台湾の他の国交国に対して、中国の金銭外交についての警鐘を鳴らした。

しかし、それから一か月を経ていない五月二十四日、今度はアフリカのブルキナファソが台湾と断交した。前年のサントメ・プリンシペに続く断交によって、アフリカではスワジランド王国（現・エスワティニ王国）だけが国交国として残ることになった。ブルキナファソとの国交断絶に際して蔡英文總統は重要談話を発表して、強い調子で中国の多種多様な圧力を非難するとともに、台湾としては、中国が行う「金銭外交」には関与しないと、ゆるぎない立場で台湾の味方をしてくれる国交樹立国に対して感謝するとともに、全力で支援していくことを約束するとして、従来の立場を変えない意向を表明した。

馬英九政権の任期中に国交断絶、そして中国と国交樹立したガンビアの場合、国交断絶までの五年間に馬英九總統

が同国を訪問したのは一度だけであった。また、アフリカの極小国であるサントメ・プリンシペの場合も、二〇〇八年から二〇一六年までの八年間で、馬英九總統の訪問が二〇一四年一月の一回だけであった。台湾として手厚い対応をしていたとは必ずしも言えない。これに対して、ブルキナファソの場合、蔡英文總統は未だ訪れていないものの、馬英九總統が二回、行政院長だった呉敦義が一回と、都合三回訪問しており、両者の関係は比較的頻繁に確認されているはずであった。しかし、それは断交への歯止めとはならなかった。

ドミニカ共和国の場合は、十年間に馬英九總統が三回と副總統であった呉敦義が一回、さらに政権交代後の蔡英文も訪問している。都合五回の訪問は、台湾の国交国でも二番目に頻度が高かった。さらに、パナマの場合、断交までの九年間に馬英九總統が三回とトランジット、蕭萬長副總統が一回、そして蔡英文が一回なので、都合六回の訪問である。これは国交国中の最多であった。それだけ台湾として関係を重視していたことになるが、パナマとドミニカ共和国は断交した。

その直後の五月二十九日、蔡英文總統は、台湾を訪問中のハイチのモイーズ大統領と、總統府において「中華民國（台湾）の總統及び国民が長期にわたりハイチの発展を支援してくれていることに感謝する。とりわけ中華民國（台湾）の總統が、ハイチの経済発展及び起業・雇用創出に有利な新インフラ建設計画の実施を支持してくれていることを高く評価する」などを内容とする共同声明を発した。次々に国交国を失って台湾の国際生存空間が狭まるなかで、国内外に向けて、台湾が国際社会において将来に向けて存在感を示そうとしたものである¹⁷。また、六月十八日から二十日には、台湾政府の招きに応じて、ベリーズから上下両院議長一行が台湾を訪問して、両国の国会協力と交流を促進することとして、両国関係の維持を確認した¹⁸。

また台湾は、グアテマラにおいて六月三日のフエゴ山噴火によって甚大な被害が出ていることから、十万ドルの義

援金と共に一、〇〇〇トンの支援米を送ることとし、六月二十日、「グアテマラ向け支援米発送式」を実施した。²⁹⁾

二〇一八年八月には、パラグアイの新大統領就任式典への参加を主目的に、パラグアイとベリーズに訪問することとした。八月十四日にパラグアイに到着した蔡英文総統は、マリオ・アブド・ベニテス (Mario Abdo Benítez) 次期大統領と会談し、投資、インフラ建設、二国間貿易を、両国の関係発展における新たなモデルの三大主軸とすることとした。この三大主軸の下、教育、ハイテク、公衆衛生、医療の分野について、台湾企業がパラグアイのインフラ建設に投資するよう奨励すること、台湾とパラグアイの経済協力協定の効果を強化することなどで連携を強化することに両者は同意した。³⁰⁾

翌十五日、蔡英文総統は、ベニテス新大統領の就任式典に参加した。³¹⁾ 同日午後には、蔡英文総統はホンジュラスのオルガ・アルヴァラード (Olga Alvarado) 副大統領と二者会談を実施し、農業分野で重点的に協力することで合意した。特にアボカドの生産、マーケティング、販売と、コーヒー産業の強化に台湾が協力することとした。³²⁾

八月十六日から十七日、蔡英文総統はベリーズを初めて訪問した。当地では、台湾の政府が提供する国費奨学金制度「台湾奨学金」の奨学生証書授与式のほか、ベリーズの教育機関を訪問し、台湾の華碩電腦 (ASUS) によるパソコン寄贈式に出席した。また、十七日には、コルヴィル・ヤング (Colville Young) 総督及びバローウ首相と会談を行った。ヤング総督は、地球環境の持続可能性の重視を訴えるとともに、台湾の経済発展における環境への配慮に敬意を表した。また、バローウ首相からは、台湾が教育分野で支援し、台湾でベリーズの若者が職能訓練に参加できるようにすること、インフラ建設の支援をすることに期待が示され、蔡英文総統からは支援協力の考えが表明された。³³⁾

しかし、蔡英文総統によるラテン・アメリカ諸国歴訪直後の八月二十一日、中米エルサルバドルと台湾との国交断絶が発表された。台湾政府の説明では、エルサルバドルは二〇一七年以降、台湾からの多額の資金援助を求めている

が、台湾は同国の債務危機を回避するためにその要請に応じなかった。また、オルテガ大統領の与党の選挙資金支援を求めてきたが、これは民主主義の原則に反するため応じなかった。そこへ中国が「金銭外交」をしかけ、台湾との断交、中国との国交樹立へとエルサルバドルを向かわせたものである。⁽⁸⁾

馬英九政権誕生から満九年余り後のエルサルバドルの国交断絶だが、この間、馬英九總統による訪問が二回、さらに民進党の蔡英文總統による訪問が一度あり、各總統の任期毎に台湾の總統は訪問していた。しかし、相手国からの金銭外交の要求に断固として応じなかったところへ、中国が干渉してきたものである。

蔡英文政権の発足以来、二十二カ国あつた国交国が十七カ国に減少する中で、パラグアイのベニテス (Mario Abdo Benítez) 大統領が台湾を訪問すると、十月八日、蔡英文總統との間で共同声明に署名した。蔡英文總統は、今後、パラグアイの学生に対する奨学金の提供や、各種技能訓練などで協力するほか、パラグアイ産牛肉の輸入割当を引き上げるなどして、双方の経済・貿易関係の促進を図りたいと述べた。これに対して、ベニテス大統領は、両国の関係が共同の価値観に基づくものだからだと説明。地理的距離は遠いが、互いに似通った歴史を持つことから、「両国の友情は、似たような信条に基づくもので、それは決して利益の交換によるものではない」と応じた。⁽⁹⁾

また、エルサルバドルとの国交断絶の結果として、台湾は、同国に対して予定していた協力計画及び支援計画を全面停止し、技術支援団を撤退させるとともに、それらの一部を国交維持国のニカラグアに振り向けることとした。ニカラグアで行われることになったのは、家族規模の水産品養殖、海水魚の養殖、健康的な野菜・果物の栽培、農産物の生産と商業的な発展、「一郷一特産」、地理情報システムの六項目である。⁽¹⁰⁾

二〇一九年になると、二月二十二日のセントルシア独立四十周年式典に際して、立法院長の蘇嘉全が参加することにし、アレン・シャスネ首相との会談も行った。同首相は、両国は遠く離れているが、国民及び政府間の友情は厚く、

台湾は持続可能な開発を目指すセントルシアの忠実なパートナーであり、両国の将来に強い自信と期待を持っていると強調した。⁽⁶⁷⁾

また、蔡英文総統は、前年に続いて七月にラテン・アメリカ四カ国への訪問を実施した。ニューヨーク経由で、七月十四日に最初の訪問国であるハイチに到着すると、蔡英文総統は台湾の優れた製品を展示する「台湾商品展 (Taiwan Product Exhibition)」の開幕式に出席した。その後、ジョブネル・モイズ (Jovenel Moïse) 大統領及び政府高官らと二国間会談を行った。モイズ大統領は、台湾の協力によって現在取り組んでいる稲作計画、ソーラーポンプ設置のための資金援助計画、それに「ハイチ電力網強化プロジェクト」などを挙げ、台湾が他の海外諸国と共に、ハイチの発展に協力してくれるよう期待を寄せた。⁽⁶⁸⁾

七月十三日には、蔡英文総統は第二の訪問国セントクリストファー・ネイビスに到着し、そのビニーズビーチにおいて、台湾の協力による景観公園の起工式に参加した。また、ティモシー・ハリス (Timothy Harris) 首相と会談し、蔡英文総統は、「目標は明確だ。それはセントクリストファー・ネイビスを、カリブ地域において安全且つ持続可能な観光地にすることだ」と強調した。両政府間では、技能教育に関する二国間協定も締結し、タプリー・シートン (Tapley Seaton) 総督からは、蔡英文総統に対して勳章「Order of Saint Christopher and Nevis」が贈られた。⁽⁶⁹⁾

続いてセントビンセント・グレナディーンを訪れた蔡英文総統は、ラルフ・ゴンサルヴェス (Ralph Gonsalves) 首相と会見した。また、両政府間で、「中華民国 (台湾) 政府及びセントビンセント・グレナディーン政府による国家財政に関する協力協定」と「中華民国 (台湾) 政府及びセントビンセント・グレナディーン政府による国際犯罪対策に関する協定」を締結した。さらに、警察車両としてオートバイ二台、自動車八台を寄贈した。同国と台湾との協力プロジェクトとしては、「糖尿病の予防・治療能力の構築計画」、「バナナ栽培地再生プロジェクト」が進められ

ており、新たに「バスのスマート運行管理とセキュリティ監視システムの構築計画」がスタートした。⁽⁹⁰⁾

最後の訪問国となったセントルシアでは、七月十七日蔡英文總統一行は、セント・ジュード病院 (St. Jude Hospital) を訪れ、同病院の再建工事計画の起工式に参加した。蔡英文總統は、両国間の協力では、医療方面においては、彰化基督教医院がセント・ジュード病院と姉妹病院となり、医療技術だけでなく医療従事者の交流においても、非常に頻繁且つ深い交流を維持していると説明した。⁽⁹¹⁾

翌七月十八日、蔡英文總統は、アレン・シャスネ (Allen Chastant) 首相と共に、「セントルシア政府ブロードバンド第二期計画 (GNBプロジェクト) 』始動セレモニー」に出席した。両国は、これまでに第一期計画を進めていたが、新たな段階に入った。また、両首脳は、台湾の援助で建設されたグロス・アイレット (Gros Islet) のヒューマン・リソース・ディベロップメント・センター (人材開発センター) を訪れ、ブランク (銘板) 除幕式典に出席した。⁽⁹²⁾

以上のように、ラテン・アメリカ地域では、馬英九政権が八年間のうち馬英九自身のラテン・アメリカ訪問が八回、蕭萬長と呉敦義を数えれば十回であったのに対して、蔡英文總統の三年半の間では、蔡英文が四回に加えて陳建仁と蘇嘉全がそれぞれ一回の外遊で合計六回ある。つまり、蔡英文政権は馬英九政権と変わらず国交維持の努力をしてきたが、十二カ国との国交を保つことができず、パナマ、ドミニカ共和国とニカラグアの三カ国との国交が断絶する結果となった。

(3) 太平洋島嶼国との外交

太平洋島嶼国は、いずれも小国であり、面積、人口共に小さい国、もしくは極めて小さい国から構成されているが、先述のとおり、広大な排他的経済水域をもっており、海洋戦略上重要な国々である。台湾の中華民国とは六カ国が国交を維持しており、二〇〇八年以来二〇一八年まで特段の変化がなかった。しかし、二〇一九年九月になると、五日の間にソロモン諸島とキリバスが相次いで国交断絶を宣言するという激変に見舞われた。

小国が多い上に、交通が不便であるため、台湾の首脳による訪問は多くない。馬英九政権の場合、第一期の二〇一〇年三月に太平洋島嶼国訪問を実施し、六カ国すべてへの訪問が行われた。これが馬英九総統による最初で最後の太平洋島嶼国訪問となった。

三月二十一日に台湾を発った馬英九総統一行は、二十二日に最初の訪問国であるマーシャル諸島に到着した。馬英九総統は、両国がともに、自由、民主主義、平和を愛する国家であるとの認識を示すとともに、農業・漁業、科学技術、医療、教育、文化など多方面での協力が行われており、それらが具体的な成果を上げていると述べている。チューレラン・ゼドケア (Turelang Zedkria) 大統領と会見し、馬英九総統が「より一層の二国間の相互運動を強化していく」と述べると、ゼドケア大統領も「両国の友好関係は強固であり、わが国は引き続き中華民国支持を堅持」と述べた。

馬英九総統一行は、同日午後にはマーシャル諸島を発ち、第二の訪問国であるキリバスに向かった。キリバスでは、馬英九総統は、トン (Anote Tong) 大統領、同国の漁業相らと共に台湾技術団による水産養殖場を視察した。また、台湾の技術団が栽培した野菜、鶏卵、サバヒのチャリティーの収益金を同国の障害者の学校 (disabled school)、障害者協会 (The Toa Mutoa)、禁酒協会 (AARF) などの慈善組織に寄贈した。馬英九総統は、キリバスは、海拔わ

ずか二メートル、大潮時には一メートルになり、気候変動の影響が大きいため、台湾の省エネ、減炭措置を参考として提供することとした。^⑧

続いて馬英九總統は、三月二十三日、ツバルを訪問して、アピサイ・イエレミア (Apisai Ielemia) 首相と会談し、国会での歓迎を受けた。馬英九總統は、「両国の交流は密接であり、協力関係は絶えず拡大してきた。このたびの訪問により既存の基礎の下に両国の友好関係がより一層強化され、さらに前に向かって前進するよう願っている」と述べた。また馬英九總統一行は、海面上昇の現状を視察するとともに、歓迎宴において馬英九總統は、二〇〇九年八月八日の台湾中南部水害に際してツバル政府と国民から国民総生産 (GDP) の一％という世界的記録を更新するほどの義捐金を惜しむことなく寄贈されたことに対して感謝の意を表した。

同日夕刻には馬英九總統一行は第四の訪問先であるナウルへ移動した。馬英九總統は、マーカス・ステイブン大統領の歓迎晩さん会に出席し、その場で台湾から食用米の寄贈を発表した。馬英九總統は翌二十四日の訪問先で、中華民國の農業技術団がナウルにおいてこれまでの三年間、ナウルで三年以内に六種類の農・畜産品を生産し、農産品の輸入をゼロにするという『3・6・0計画』を推進してきたことに触れ、その成果が示されたと述べた。^⑨

三月二十四日午後にはソロモン諸島に到着すると、ローソン・タマ・サツカースタジアムを訪れ、サツカーボール二五〇個を同国国民へ寄贈し、デリック・シクア (David Derek Sikua) 首相がこれを受け取った。その際に、馬英九總統は、ソロモン諸島は、一九八三年に中華民國と外交関係を樹立して以来、一貫して国際社会の場で中華民國への支持と協力を示していることに感謝し、台湾はソロモン諸島の最も堅実なパートナー国であると述べた。また、フランク・カブイ (Sir Frank Uru Otagoro Kabui) 総督から、「ソロモン諸島の星」の勳章を授与された。翌日には、馬英九總統はシクア首相に、「特種大綬景星勳章」を授与し、総理府での太陽エネルギーによる電気供給モデルシステ

ムの看板設置の式典にも出席した。さらに国会演説を行い、積極的に援助国および「太平洋諸島フォーラム(P I F)」や同組織が主導する「ソロモン地域支援ミッション(R A M S I)」間の協力も含めた地域の組織と共に地域の全体的発展に尽力していく決意を述べた。⁹⁵⁾

最後の訪問国パラオには、馬英九総統は三月二十六日に到着した。ジョンソン・トリビオン(Johnson Toribiong)大統領およびケライ・マリウル副大統領らの出迎えを受け、トリビオン大統領と会談した。また、馬英九総統と同大統領は、パラオ文化センターで開催されている「台湾先住民の伝統と現代文物工芸特別展」の開幕式を執り行った。また、アサヒ野球場で開催される両国の野球親善試合の開幕式も行った。翌二十七日には、両首脳が一緒に船舶でセント・アイランド海域を訪れ、パラオの海洋資源保護に対する活動について理解を深めた。⁹⁶⁾

その後、太平洋島嶼国からは、台湾の総統就任式には政府首脳が参加したほか、大統領夫妻の台湾訪問など、何度か行われているが、馬英九総統が太平洋島嶼国を巡ったのは一度だけである。

二〇一六年に総統に就任した蔡英文は、二〇一七年十月末から太平洋島嶼国への訪問を実施した。蔡英文総統にとって初の島嶼国訪問は、「オーストロネシア語族の島々と手を携える」旅と位置付けられ、マーシャル諸島、ツバル、ソロモン諸島の三国をめぐるものとなった。⁹⁷⁾

十月二十八日に台湾を発った蔡英文総統一行は、ハワイにトランジットで立ち寄った後、三十日にマーシャル諸島に到着し、ヒルダ・ハイネ大統領と会談するとともに、両国政府は、「総統奨学金計画基金に関する了解覚書」と「移民に関する事務と人身売買防止の提携覚書」を調印した。また、国会で演説した蔡英文総統は、マーシャル諸島の「食糧安全保障」に協力しており、ブタの繁殖に関する技術や知識を身につけた人材の育成にも努めていると言及したほか、オーストロネシア語族文化を媒介として、オセアニア諸国との相互交流と理解を深めたいと述べた。最後

に、マーシャル諸島を含むオセアニアの国交樹立国六カ国のパスポート所持者に、台湾への渡航査証（ビザ）免除措置を実施することを宣言した。⁽⁹⁸⁾

十一月一日にツバルに到着した蔡英文総統は、イアコバ・イタレリ (Jakoba Italeli) 総督とエネレ・ソポアガ (Enele Sopoaga) 首相とそれぞれ会見した。蔡英文総統は、ツバル最大のナウティ (Nauti) 小学校を訪問して、児童による歌や踊りを鑑賞したほか、プリンセスマーガレット病院を訪れて、台湾とツバルの医療協力についてのブリーフィングを受けた。⁽⁹⁹⁾

その後、同日に蔡英文一行はソロモン諸島に移動した。ソロモン諸島では、蔡英文総統は、フランク・カプイ総督とソガバレ首相などと会談し、二日夜の晩さん会ではソロモン諸島の政府と国民の温かいもてなしに感謝した。⁽¹⁰⁰⁾

また、二〇一八年十一月二十日には、マーシャル諸島を呉釗燮外交部長が訪問し、国交樹立二十周年イベントに参加するとともに、「刑事共助協定」及び「戦略的協力パートナーシップ協定」に署名した。⁽¹⁰¹⁾

二〇一九年三月に蔡英文総統は、パラオ、ナウルを初めて訪れ、合わせてマーシャル諸島にも再び赴いた。パラオとナウルからはそれぞれ二〇一八年十一月と二〇一九年一月に、大統領が台湾を訪れており、そのおりに蔡英文総統の来訪を求めていた。また、マーシャル諸島では、女性の国家元首であるヒルダ・ハイネ大統領が、太平洋の女性リーダーを集めた会議を開催することとしたため、蔡英文総統も参加することとしたものである。なお、太平洋島嶼国の国交国六カ国のうち、蔡英文総統が訪問していないキリバスについては、訪問しようとして調整したが、両者の都合を合わせられずとりやめた。⁽¹⁰²⁾

三月二十一日、最初の訪問国であるパラオに到着した蔡英文総統は、二十三日まで滞在して、二十二日には台湾の農業技術団を視察した。また、両国は海上保安に関する協力協定を締結し、蔡英文総統の視察の下で、台湾の海洋委

員会巡視船「巡護七号」がパラオ船籍漁船「ロンドン号」の通報に応じて海難救助を実施する演習が行われたほか、トミー・レメンゲサウ (Thomas Esang Remengesau, Jr.) 大統領と首脳会談を持った。⁽¹⁰³⁾

次いで三月二十四日、蔡英文總統は二つ目の訪問国であるナウルに到着した。翌二十五日には、蔡英文總統は、台湾農業技術団による「台湾農畜教育センター (Taiwan Agriculture and Livestock Education Center in Nauru)」の開設を祝う除幕式に出席、 Baron Waka (Baron Waga) 大統領の手で幕が開かれた。その後、技術団が設置した養鶏場と農場を視察し、技術団が推進するナウルでのキノコ類の栽培計画について説明を受けた。また両国政府は、「中華民國 (台湾) 政府及びナウル共和国政府の海上保安協力協定」に署名した。これによって、台湾とマーシャル諸島、パラオ、ナウルとが海上保安に関する協定で結ばれたことになり、職員の相互派遣や合同訓練を行うこととなった。⁽¹⁰⁴⁾

三月二十六日、マーシャル諸島を訪れた蔡英文總統は、ヒルダ・ハイネ大統領が開催した女性リーダーを集めた国際会議「太平洋女性リーダー協力会議 (Pacific Women Leaders' Coalition Conference)」に参加した。蔡英文總統は、会議で、台湾が女性の活躍が進んでいる社会であり、「女性・ビジネス・法律 (Women, Business and the Law)」二〇一九年版によると、台湾のスコアは九十一・二五でアジアでトップであることを紹介し、台湾は長期的に、アジア地域のジェンダー平等運動において活発な役割を果たすという決意を述べた。⁽¹⁰⁵⁾

以上のように、蔡英文政権では、太平洋島嶼国との外交関係に積極的に対応していたが、キリバスには蔡英文總統の公式訪問が行われなかった。

そうしたところ、九月十六日、ソロモン諸島が台湾との断交を決定したため、台湾の中華民国政府はソロモン諸島との外交関係の断絶を決定した。これによって、ソロモン諸島とのあらゆる二国間協力プロジェクトを全面停止し、中華民国 (台湾) がソロモン諸島に置く大使館、技術団、台湾衛生センター (Taiwan Health Center) を直ちに撤退

させることを決めた。ソロモン諸島が台湾に設置する在外公館職員に対しても、台湾から直ちに撤退するよう求めることとした。蔡英文總統は詳細には述べなかったが、中国による「金銭外交」と圧力の結果であると説明した。¹⁰⁶

それからわずか五日後、今度はキリバスとの国交が断絶することとなった。これについては、キリバスが二〇一八年からおよそ三、六〇〇万ドル（三十八億円）の民間航空機を台湾の資金で購入することを求めていたのに対して、台湾が低利の借款による購入を求めたところ、マアマウ（Taneu Maunau）大統領の受け入れるところとならず、他方、中国がマアマウ大統領の要望に応じたことが一つの原因と見られている。¹⁰⁷

二〇〇八年以来の台湾首脳の太平洋島嶼国訪問から見れば、馬英九政権は八年間で一回であり、蔡英文政権は三年半で三回である。ただし、国交国を個別にみると、マーシャル諸島訪問は、馬英九一回と蔡英文二回の都合三回と多く、ツバル、ナウル、ソロモン諸島は馬英九一回と蔡英文一回の二回ずつ、そしてキリバスは馬英九一回と蔡英文〇回であった。

結果的には、ソロモン諸島とキリバスの二カ国と断交したが、ソロモン諸島については、台湾の外交的取扱いに特に他と差があったわけではない。一方、キリバスには蔡英文政権は訪問しないまま断交となっており、そもそも台湾の元首として訪問し難い要因があり、それが断交につながった可能性がある。

いずれにしても、この結果、太平洋の島嶼国で台湾と国交を維持する国は六カ国から四カ国に減少することになり、全体として台湾の国交国は十五カ国にまで減少することになった。

結語

馬英九政権成立の二〇〇八年五月から蔡英文政権一期目の三年半、二〇一九年十月までの期間における、台湾の中華民國の国交国の状況と、台湾の總統等政府首脳による国交国訪問の状況を概観した結果、以下の諸点を知ることができた。

先述のとおり、対中宥和政策で中国の主張する「一つの中国」原則と「九二年コンセンサス」を受け容れ「活路外交」「外交休戦」を掲げた馬英九政権の国際活動に対して、WHAへのオブザーバー参加を認める等、中国は容認的であり、二期八年のほぼ全期間、積極的に台湾の国交国に圧力をかけ、中国との国交樹立を進めようとはしなかった。その間の馬英九總統の国交国への外遊は二〇〇八年から二〇一二年の一期目が六回、十八カ国であり、二〇一二年から二〇一六年の二期目が五回、十四カ国であつて、二期目が少なくなっている。なお、二〇一二年四月、總統選挙で再選を決めてからアフリカ歴訪を実施しており、二〇一六年の總統選挙以後には外遊をしていないので、このタイミングの一回三カ国分を除いて考えれば、一期目も五回十五カ国で、二期目とほぼ変わらない。また、馬英九政権期間中には、二〇一三年にガンビアと断交したが、その後でも特に外遊のペースに変化は見られない。

これに対して、蔡英文總統は、三年半の間に、七回二十カ国を訪問しており、馬英九政権期より積極的に国交国を訪問していることが見て取れる。言い換えれば、馬英九政権は、中国からの外交的圧力が低いことを好機として、国交国との交流を頻繁に行い、その関係を強固にしようとしたとは言えない。一方、蔡英文政権は、中国からの外交的圧力の中で、国交国との関係強化を図ろうとして、積極的に外遊をしたと見られる。

また、キリバスのケースを除けば、国交断絶に至った国との外交交流は、一見して直前まで通常通りに行われており、主要な式典には断交の数か月前でも訪問団が送られている。また、総統の訪問時には、相互の交流の継続が謳われ、経済的支援の約束が交わされているが、こうした首脳発言や支援の継続は、外交関係継続の保証とならないといえる。

例えば、ブルキナファソは、二〇一二年四月と二〇一四年一月の二度にわたって馬英九総統が訪問している。二〇一四年の訪問時には、馬英九総統から「ブルキナファソの国民に対し、各国の援助に対する満足度調査を行ったところ、台湾が第一位となり、満足度は九十一・四五%だった」との発言があつて、ブルキナファソとは「確固たる友好関係があり、我が国が国際社会において絶えず奮闘努力していることに支持をいただいて」いた⁽¹⁰⁶⁾。さらに二〇一六年五月の蔡英文総統の就任式典にも、首相が参列していたが、二〇一八年五月二十四日には国交断絶となつた。また、サントメ・プリンシペは二〇〇八年の第一期馬英九政権の就任式典に大統領、二〇一二年の第二期馬英九政権の就任式典には首相、二〇一六年五月の蔡英文総統就任式に外相を派遣していたが、その二〇一六年十二月に断交している。エルサルバドルの場合、二〇一七年一月に蔡英文総統が訪問した際の会談で「首脳会談では両国の友好関係を深めるといふ、揺るぎない決意について再確認した」⁽¹⁰⁷⁾が、二〇一八年八月には国交断絶となつた。

ドミニカ共和国の場合、二〇〇八年、二〇一二年の総統就任式典とも閣僚級が参列し、二〇一六年五月にも外相が参列していた。さらにその三か月後、八月二十二日に台湾から陳建仁副総統が、ドミニカ共和国の大統領就任式典に参加して、「各位は台湾との数十年間にわたる友好関係はきわめて貴重であると表明した。『互恵互助』の協力方法についても賛同し、双方にプラスとなる様々な計画を共同で打ち立て、それにより双方の友好関係が深化するよう期待の意を表した」⁽¹⁰⁸⁾。しかし、二〇一八年五月一日には国交断絶となつた。

以上のように、台湾の中華民国の国交国との関係は、台湾側からの相手国訪問など外交努力の如何にかかわらず国交が断絶することがある。そこには、馬英九政権と蔡英文政権における対中関係の変化が色濃く影を落としているおり、台湾と国交国との関係は、台湾と相手国との関係によって独立的に決まるものではなく、台湾と中国および相手国と中国との関係に従属的に決まることがしばしば見られるということである。

また、中国が、台湾との国交を断絶させて自国との国交を樹立させたとき、台湾政府は、中国の「金銭外交」を批判しているが、エルサルバドルとの断交に際しての台湾の対応は興味深い。すなわち、エルサルバドルへの支援として予定されていた協力計画及び支援計画を、国交断絶に際して全面停止し、技術支援団を撤退させるとともに、それらを国交維持国のニカラグアに振り向けたことである。一方が国交断絶となったとき、隣接する国交国への支援の増大に充てることは、断交ドミノへの予防策である。台湾としては新たな支出を伴うものではなく、現実的な対応である。しかしながら、前述のとおり、台湾と国交国との関係が、相互の関係によって独立的に決定されるものではなく、台湾と中国および相手国と中国との関係に従属的に決まるとすれば、これも国交国維持の保証にはいえないだろう。

追記 本小論は、平成国際大学の二〇一九年度共同研究、「太平洋島嶼国の現状と課題」の共同研究費を得た研究成果の一つとして発表するものである。ここに記して感謝の意を表したい。

【注】

- (1) 「ソロモン諸島 台湾と断交 中国と国交樹立」(読売新聞 朝刊、二〇一九年九月十七日)
- (2) 「キリバス、台湾と断交 米豪劣勢 対応見直し」(読売新聞 東京朝刊、二〇一九年九月二十一日)
- (3) 「キリバス、台湾と断交 南太平洋 中国攻勢 蔡英文政権発足後7か国目」(読売新聞 東京朝刊、二〇一九年九月二十一日)
- (4) 「台薩断交」談中華民國断交史 陳水扁・蔡英文「維持現状」擋不住中国的「三光政策」(風傳媒、二〇一八年八月二十二日、<https://www.storm.ng/article/480105>)。以下、陳水扁政権に至るまでの、台湾の中華民國の国交国数はこの資料による。
- (5) 国連加盟国数は、国際連合広報センターの公式ホームページ「国連加盟国加盟年順序」による。 https://www.unice.or.jp/info/un/un-organization/member_nations/chronologic/calendar/
- (6) 「中国、バチカンと司教任命で暫定合意」(産経新聞 朝刊、二〇一八年九月二十二日)
- (7) 中央選挙委員会の公式ホームページ内、選挙資料庫網站、 <https://db.cec.gov.tw/histQuery.jsp?voteCode=20080301PIA1&qryType=ctks>
- (8) 「第十二任總統、副總統就職」(『外交部通訊』二十七卷第三期、二〇〇八年六月、 <https://www.multilingual.mofa.gov.tw/web/web-UTF-8/out/2703/report01.html>)
- (9) 台友邦及邦交国出席總統就職典禮「Voice of America Chinese News」 <https://www.voachinese.com/dt-21-w2008-05013-vor43-63287512/80927.htm>。阿扁總統最後一天 依旧忙不停… 自由時報、二〇〇八年五月十三日、 <https://news.ltn.com.tw/news/focus/paper/21655>
- (10) 「台友邦及邦交国出席總統就職典禮」、大紀元、二〇〇八年五月十三日、 <https://www.epochtimes.com/b5/8/5/13/n2116162.htm>
- (11) 「總統就職典禮230外賓來賓」、中央通信社、二〇〇八年五月十九日、 https://www.ocanews.net/overasiacomunity/article/article_story.jsp?id=139938
- (12) 中央選挙委員会の公式ホームページ内、選挙資料庫網站、 <https://db.cec.gov.tw/histMain.jsp?voteSel=20160101A1>
- (13) 「五九国近七〇〇人 外賓慶賀超越往年」自由時報、二〇一六年五月十八日、 <https://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/991071>
- (14) 總統府の公式ホームページ、ニュース、總統及副總統伉儷接受外賓致賀、 <https://www.president.gov.tw/NEWS/20442>
- (15) 岡崎研究所「台湾と断交のガンビア 疑われる中国の関与」「Wedge Infinity」二〇一三年十二月二十七日、 <https://wedge.ismedia>

- jp/articles/-/3448
- (16) 「馬英九總統がアフリカ三カ国訪問へ出発」,台北駐日経済文化代表処公式ホームページ:台湾週報,二〇一二年四月九日, https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/15944.html。*以下、同サイトのニュースは「台湾週報」とする。
- (17) 「馬英九總統がガンビアを公式訪問」, Taiwan News(日本語), 二〇一二年四月十九日, https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/15955.html
- (18) 「台湾『中国に強制連行』と抗議 ケニアから四五人移送」, 日本経済新聞, 二〇一六年四月十二日, https://nikkei.com/article/DGXIASGM12H7X_S6A410C1FF1000?data=DGXZZO0242484019022010000007&s=5
- (19) 「マレーシアの詐欺事件で摘発された台湾人32人が中国へ引き渡し、台湾が抗議」米国ネット『台湾よりも中国を恐れている』「犯罪者は犯罪者」, 中央通訊社:レコードチャイナ, 二〇一六年五月三日, https://www.excite.co.jp/news/article/Recordchina_20160503002/
- (20) 竹内孝之「台湾:蔡英文政権発足前後の対中国関係」, JETRO:IDE スクエア, 二〇一六年七月, https://www.ide.go.jp/Japanese/IDEsquare/Eyes/2016/RCT201611_001.htm?media=pc
- (21) 「馬英九總統がブルキナファソを公式訪問」, 台湾週報, 二〇一二年四月十一日, https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/15950.html
- (22) 西アフリカのブルキナファソが台湾と断交 中国の台湾包囲網、一段と狭まる」, 日本経済新聞, 二〇一八年五月二十四日, <https://www.nikkei.com/article/DGXNZO30941080U8A520C1FF1000/> 「台湾と断交のブルキナファソ、中国と国交樹立」, AFP:BB News, 二〇一八年五月二十七日, <https://www.afpb.com/articles/-/3176178>
- (23) 「ブルキナファソが台湾との断交を発表、中国は歓迎」, ロイターニュース, 二〇一八年五月二十五日, <https://jp.reuters.com/article/burkina-taiwan-id:BPKN1H0031>
- (24) 「馬英九總統が四月七日よりアフリカ地域の友好国4カ国を公式訪問」, 台湾週報, 二〇一二年三月十五日, https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/15911.html
- (25) 「中華民国」, サントメ・プリンシペ民主共和国との外交関係を終結」, 台湾週報, 二〇一六年十二月二十一日, https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/42647.html 「サントメ・プリンシペと中国大陸の国交回復に対する中華民国の声明」, 台湾週報, 二〇一六年十二月二十七日, https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/42764.html
- (26) 「蕭万長副總統がスワジランドを訪問」, 同国王と会談」, 台湾週報, 二〇一〇八年九月八日, https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_

- (27) 「馬英九總統がスワジランド王国のムスワティ三世国王と会談」、台湾週報、二〇一〇年七月三十日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14972.html
- (28) 「馬英九總統がスワジランド王国を公式訪問」、台湾週報、二〇一二年四月二十日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/6554.html
- (29) 「蔡英文總統、スワジランドとの協力と相互信頼は永久に」、台湾週報、二〇一八年四月十八日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/56096.html
- (30) 「馬英九總統がパラグアイのルゴ大統領就任式に出席」、台湾週報、二〇〇八年八月十八日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/13581.html
- (31) 「馬英九總統がドミニカ共和国を訪問、都市交流の強化に意欲示す」、台湾週報、二〇〇八年八月十八日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/13585.html
- (32) 「馬英九總統がベリーズに到着」、台湾週報、二〇〇九年五月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14135.html
- (33) 「馬英九總統がベリーズの国会で演説」、台湾週報、二〇〇九年六月一日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14140.html
- (34) 「台湾がグアテマラへ27台の救急車寄贈」、台湾週報、二〇〇九年五月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14136.html
- (35) 「馬英九總統がグアテマラのコロナ大統領と共同声明を発表」、台湾週報、二〇〇九年六月二日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14142.html
- (36) 「馬英九總統がエルサルバドルのフネス大統領就任式に出席」、台湾週報、二〇〇九年六月三日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/5674.html
- (37) 「馬英九總統の中米外遊、政情不安のためホンジュラス訪問を取りやめ」、台湾週報、二〇〇九年六月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14199.html
- (38) 「馬英九總統がパナマ共和国のマルティネリ大統領就任式に出席」、台湾週報、二〇〇九年七月二日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14207.html
- (39) 「馬英九總統がパナマ国会で演説、記者会見で『活路外交』の成果を強調」、台湾週報、二〇〇九年七月六日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14218.html

- (40) 馬英九總統がニカラグアを訪問、オルテガ大統領と会談」、台湾週報、二〇〇九年七月六日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14216.html
- (41) 馬英九總統がホンジュラスのロボ新大統領の就任式典に出席」、台湾週報、二〇一〇年一月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14387.html
- (42) 一月30日に馬英九總統が6日間にわたる中米外遊より帰国」、台湾週報、二〇一〇年二月一日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/14590.html
- (43) 蕭万長副總統がパラグアイを訪問」、台湾週報、二〇一一年五月十八日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/15482.html
- (44) 蕭万長副總統がパナマを訪問」、台湾週報、二〇一一年五月十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/15485.html
- (45) 呉敦義副總統がドミニカ共和国のメディナ大統領就任式に出席」、台湾週報、二〇一二年八月二十一日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/16120.html
- (46) 馬英九總統が南米およびカリブ海地域の友好国5カ国への公式訪問に出席」、台湾週報、二〇一三年八月十二日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/16752.html
- (47) 馬英九總統がハイチ共和国を訪問」、台湾週報、二〇一三年八月十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/16756.html
- (48) 馬英九總統がパラグアイ共和国に到着」、台湾週報、二〇一三年八月十六日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/16757.html
- (49) 馬英九總統がセントルシアを訪問」、台湾週報、二〇一三年八月十七日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/16759.html
- (50) 馬英九總統がセントビンセント・グレナディーンを訪問」、台湾週報、二〇一三年八月十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/16762.html
- (51) 馬英九總統がセントクリストファー・ネイビスを訪問」、台湾週報、二〇一三年八月二十一日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/16765.html
- (52) 馬英九總統がアフリカおよび中米の友好国3カ国訪問に出席」、台湾週報、二〇一四年一月二十四日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/16998.html
- (53) 馬英九總統ら一行が中米の友好国ホンジュラスを訪問」、台湾週報、二〇一四年一月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/17008.html
- (54) 馬英九總統が友好国パナマを訪問、バレラ大統領の就任式に出席」、台湾週報、二〇一四年七月二日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/17008.html

- taiwan.org/jp_ja/post/17266.html
- (55) 「馬英九總統がエルサルバドルを訪問」、台湾週報、二〇一四年七月四日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/17270.html
- (56) 「馬英九總統がドミニカ共和国訪問、議会で演説」、台湾週報、二〇一五年七月十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/17827.html
- (57) 「馬英九總統がハイチを訪問、震災復興支援で『人道支援の提供者』の役割強調」、台湾週報、二〇一五年七月十六日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/17828.html
- (58) 「馬英九總統がニカラグアを訪問、農業や防災の協力の成果を強調」、台湾週報、二〇一五年七月十七日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/17830.html
- (59) 「馬英九總統が中南米三カ国訪問の旅から帰国」、台湾週報、二〇一五年七月二十一日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/17835.html
- (60) 「蔡英文總統が6月24日よりパナマとパラグアイを訪問」、台湾週報、二〇一六年六月十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/34049.html
- (61) 「蔡英文總統のパナマ・パラグアイ訪問、長栄海運など企業が随行」、台湾週報、二〇一六年六月二十日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/34049.html
- (62) 「蔡英文總統、パナマ運河拡張工事完成式典に参加」、台湾週報、二〇一六年六月二十八日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/34049.html
- (63) 「中華民国駐パラグアイ大使館新館のオープニングに蔡英文總統が出席」、台湾週報、二〇一六年六月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/34056.html
- (64) 「中華民国がパナマと人身売買防止の協力協定締結」、台湾週報、二〇一六年六月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/34091.html
- (65) 「蔡英文總統、南米・パラグアイ共和国を訪問」、台湾週報、二〇一六年六月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/34080.html
- (66) 「蔡英文總統がパラグアイ国会で演説」、台湾週報、二〇一六年六月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/34111.html
- (67) 「陳建仁副總統、ドミニカ共和国訪問から帰国」、台湾週報、二〇一六年八月二十二日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/34111.html

- /37736.html
- (68) 「元首外交再出撃 蔡英文總統展開英捷專案」、中央通訊社、二〇一七年一月七日、<https://www.cna.com.tw/news/firstnews/201701075003.aspx>
- (69) 「蔡英文總統、國際情勢變動もホンジュラスとの関係は不変」、台湾週報、二〇一七年一月十日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/42986.html
- (70) 「蔡英文總統、ニカラグア共和国のオルテガ大統領と首脳会談」、台湾週報、二〇一七年一月十一日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/43026.html
- (71) 「尼國總統就職演説 稱蔡英文是台灣總統」、自由時報、二〇一七年一月十一日、<https://news.lm.com.tw/news/politics/breakingnews/1944062>
- (72) 「蔡英文總統、グアテマラ大統領と勳章を相互授与」、台湾週報、二〇一七年一月十二日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/43019.html
- (73) 「蔡英文總統、エルサルバドル共和国から叙勲」、台湾週報、二〇一七年一月十六日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/43173.html
- (74) 「中華民国、パナマ共和国と断交」、台湾週報、二〇一七年六月十三日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/47771.html
- (75) 「中華民国政府、ドミニカ共和国と国交断絶」、台湾週報、二〇一八年五月一日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/56382.html
- (76) 「蔡英文總統、ブルキナファソとの断交について談話を発表」、台湾週報、二〇一八年五月二十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/56973.html
- (77) 「蔡英文總統、ハイチ共和国のモイーズ大統領と共同声明」、台湾週報、二〇一八年五月三十日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/57060.html
- (78) 「ベリーズの上下院議長一行が台湾を訪問」、台湾週報、二〇一八年六月二十日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/57584.html
- (79) 「外交部の劉徳立常務次長がグアテマラ向け支援米の発送式」、台湾週報、二〇一八年六月二十二日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/57630.html
- (80) 「蔡英文總統、バラグアイ次期大統領と会談」、台湾週報、二〇一八年八月十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/58898.html

- html
- (81) 「蔡英文總統、パラグアイ共和国の大統領就任式に出席」、台湾週報、二〇一八年八月十六日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/58942.html
- (82) 「蔡英文總統、ホンジュラス副大統領と二者会談」、台湾週報、二〇一八年八月十七日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/58966.html
- (83) 「蔡英文總統、ベリーズの工業・農業の発展やインフラ建設への協力を約束」、台湾週報、二〇一八年八月二十日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/58976.html
- (84) 「中華民国とエルサルバドル共和国が国交断絶、国家の尊厳守るため」、台湾週報、二〇一八年八月二十一日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/58997.html
- (85) 「蔡英文總統、パラグアイ共和国のベニテス大統領と共同声明」、台湾週報、二〇一八年十月九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/60170.html
- (86) 「外交部の6支援計画、対象国を断交のエルサルバドルからニカラグアに変更」、台湾週報、二〇一八年十月二十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/60700.html
- (87) 「立法院の蘇嘉全院長、セントルシア独立40周年記念イベントに参加」、台湾週報、二〇一九年二月二十二日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/63126.html
- (88) 「蔡英文總統、ハイチとの協力強化を確認」、台湾週報、二〇一九年七月十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/65688.html
- (89) 「蔡英文總統、セントクリストファー・ネイビス連邦を訪問」、台湾週報、二〇一九年七月十六日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/65716.html
- (90) 「蔡英文總統外遊、セントビンセント・グレナディーンで2つの協定締結」、台湾週報、二〇一九年七月十七日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/65734.html。「蔡英文總統、セントビンセント・グレナディーンとの交流深める」、台湾週報、二〇一九年七月十八日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/65771.html
- (91) 「蔡英文總統、セントルシアで病院建設起工式に出席」、台湾週報、二〇一九年七月十八日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/65784.html
- (92) 「蔡英文總統、セントルシアのデジタル・デバイド解消に意欲示す」、台湾週報、二〇一九年七月十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/65784.html

- (93) 「馬英九総統がマーシャル諸島およびキリバスを公式訪問」、台湾週報、二〇一〇年三月二十四日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/14687.html
- (94) 「馬英九総統が第3・第4の訪問国、ツバルとナウルを公式訪問」、台湾週報、二〇一〇年三月二十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/14689.html
- (95) 「馬英九総統外遊、ナウル訪問2日目と第5番目の訪問国ソロモン諸島を訪問」、二〇一〇年三月二十六日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/14691.html
- (96) 「馬英九総統、外遊の最終訪問国パラオを訪問」、台湾週報、二〇一〇年三月二十九日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/14696.html
- (97) 「蔡英文総統が『オーストロネシア語族の島々と手を携える』、太平洋の友好国歴訪へ」、台湾週報、二〇一七年十月十六日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/51452.html
- (98) 「蔡英文総統、マーシャル諸島の国会で演説」、台湾週報、二〇一七年十月三十一日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/52097.html
- (99) 「蔡英文総統、ツバル訪問を終える」、台湾週報、二〇一七年十一月二日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/52169.html
- (100) 「蔡英文総統、ソロモン諸島の政府と国民に感謝」、台湾週報、二〇一七年十一月三日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/52224.html
- (101) 「台湾とマーシャル諸島、新たに2つの協定結び関係強化」、台湾週報、二〇一八年十一月二十一日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/61312.html
- (102) 「蔡英文総統、パラオとナウルとマーシャル諸島の三か国歴訪へ」、台湾週報、二〇一九年三月十三日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/63503.html
- (103) 「外遊の蔡英文総統、パラオ大統領とマンゴリーの苗木植える」、台湾週報、二〇一九年三月二十五日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/63701.html
- (104) 「ナウルを訪問の蔡英文総統、『台湾農畜教育中心』の除幕式などに参加」、台湾週報、二〇一九年三月二十六日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/63722.html
- (105) 「蔡英文総統、マーシャル諸島で女性リーダー集めた国際会議に出席」、台湾週報、二〇一九年三月二十七日、https://origin-www.roc-taiwan.org.jp_ja/post/65821.html

- roc-taiwan.org/jp_ja/post/63813.html
⑩「中華民国、ソロモン諸島と国交断絶」、台湾週報、二〇一九年九月十七日、<https://origin-www.roc-taiwan.org/ja/post/66962.html>
⑪「索金援買客機不成 吉里巴斯棄台投中」、自由時報、二〇一九年九月二十一日、<https://news.ltn.com.tw/news/politics/paper/1319379>
⑫「馬英九總統がブルキナファソを訪問」、台湾週報、二〇一四年一月二十八日、<https://origin-www.roc-taiwan.org/ja/post/17005.html>
⑬前掲、73。
⑭前掲、67。